
令和 3 年度
運営協議会報告書



令和 3 年 12 月 24 日（金）開催

独立行政法人国立高等専門学校機構

秋田工業高等専門学校

は じ め に

秋田高専では、平成 29 年度に本科の学科改組が文科省に認められ、従来の四学科体制から一学科八コースの「創造システム工学科」への変革が行われました。その時入学した学生は現在第 5 学年になり、改組は今年度で完了します。この改組では、融合複合分野の基礎知識に加えて、得意とする特定工学分野での高度な専門知識・技術を身につけた創造性豊かな技術者を育成する新カリキュラムが整備されました。そして、この教育課程をベースとして高い国際展開力を育むべく「5 か月間の長期海外技術研修を核としたくさび型グローバルエンジニア育成事業」を実施し、地方都市・秋田から世界に向けて積極的にはばたく学生を育てる教育を実践しています。また、専攻科においても、本科の改組が今年度完成することを受け、令和 4 年度に一専攻四コース制へと移行します。

秋田高専では、平成 28 年度より外部有識者で構成される運営協議会（1 期 2 年）を設置し、様々な分野の委員より本校の教育・研究・社会貢献活動全般について、大所高所よりご意見を頂き、それをその後の本校の運営に反映させてきました。本年度は 3 期目の最終年度に当たりますので、今期の締めくくりとして、令和 3 年 12 月 24 日（金）に運営協議会全体会議を ANA クラウンプラザホテル秋田にて開催させて頂きました。会議では、秋田高専における 2 年間の活動状況を本校の幹部教職員によって説明させて頂き、それを受けた形での運営協議会委員の皆様による質疑・提言を含めた審議を行って頂きました。

本報告書は、運営協議会全体会議の詳細議事の記録に加えて、運営協議会の設置に関わる規程ならびに協議会委員構成を示したものです。この報告書が、今後の秋田高専の運営改善に反映されることは論を待ちませんが、秋田高専に関心を持つ諸兄姉に対しても、秋田高専に対する深い理解に役立つものと期待しています。

最後になりますが、運営協議会委員として審議にご参画頂きました皆様には深く感謝申し上げます。

令和 4 年 3 月

秋田工業高等専門学校長 植 松 康

目 次

はじめに

1. 運営協議会委員名簿.....	1
2. 学校側出席者名簿.....	2
3. 運営協議会規則.....	3
4. 運営協議会次第等.....	4
5. 運営協議会会場景.....	6
6. 運営協議会議事録.....	8
7. 議事説明資料.....	50

令和3年度 秋田工業高等専門学校運営協議会委員名簿

秋田県産業技術センター 技術フェロー	赤 上 陽 一
秋田工業高等専門学校同窓会	石 井 昭 浩
長岡技術科学大学 図書館長・地域防災実践研究センター長	大 石 潔
秋田工業高等専門学校後援会 会長	金 子 智 紀
秋田県中学校長会 会長	工 藤 隆
秋田工業高等専門学校産学協力会 会長	菅 原 雅 史
秋田魁新報社執行役員 経営管理本部長	田 口 清 洋
秋田市議会議員	成 沢 淳 子
秋田大学大学院 理工学研究科長	山 村 明 弘

(敬称略)

令和3年度 秋田工業高等専門学校運営協議会学校側出席者名簿

校 長	植 松 康
副校長（総務担当）	安 東 至
副校長（教育担当）・教務主事	榑 秀次郎
副校長（研究担当）・地域共同テクノセンター長	宮 脇 和 人（欠席）
校長補佐・学生主事	木 澤 悟
校長補佐・寮務主事	小 林 貢
校長補佐・専攻科長	丸 山 耕 一
校長補佐・国際交流担当	武 井 由 智
人文科学系一般教科長	石 塚 政 吾
自然科学系一般教科長	金 田 保 則
事務部長	久留主 豊
総務課長	飯 塚 博 幸
学生課長	葛 西 一 宏

【陪席】

総務課課長補佐（総務担当）	眞井田 善彰
総務課総務係員	佐 藤 樹

秋田工業高等専門学校運営協議会規則

(設置)

第1条 秋田工業高等専門学校（以下「本校」という。）に外部有識者による運営協議会を置く。

(目的)

第2条 運営協議会は、本校の教育研究活動等の状況について助言及び評価等を行い、本校での自己点検・評価に関する活動を支援することを目的とする。

(任務)

第3条 運営協議会は、次の各号に掲げる事項について、校長の諮問に応じて審議し、校長に対して提言及び助言を行う。

(1) 本校の教育研究活動等の状況について本校が行う自己点検・評価に関する重要事項

(2) その他本校の運営に関する重要事項

(組織)

第4条 運営協議会は、次の各号に掲げる者のうちから、校長が委嘱した委員をもって組織する。

(1) 本校の所在する地域の関係者

(2) 大学その他の教育研究機関の教職員

(3) その他高等専門学校に関し広くかつ高い見識を有する者

(任期)

第5条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

2 前項の委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(会長)

第6条 運営協議会に、会長を置き、校長が指名する。

2 会長に事故等がある場合は、校長が指名する委員がその職務を代行する。

(運営)

第7条 運営協議会の会議は、校長が招集し、会長がその議長となる。

(庶務)

第8条 運営協議会の庶務は、総務課において処理する。

(雑則)

第9条 この規則に定めるもののほか、運営協議会の運営に関し必要な事項は、校長が別に定める。

附 則

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成31年4月1日から施行する。

令和3年度秋田工業高等専門学校運営協議会 次第等

1. 日 時 令和3年12月24日（金）14：30～17：50
2. 会 場 ANA クラウンプラザホテル秋田 シリウスの間
3. 次 第
 1. 開 会
 2. 校長挨拶
 3. 運営協議会委員紹介
 4. 学校側出席者紹介
 5. 配付資料説明
 6. 会長（議長）選出
 7. 会長（議長）挨拶
 8. 議 事
 - 【秋田高専令和3年度の活動について】
 - I 総務に関する事項
 - II 国際交流に関する事項
 - III 教育に関する事項（本科）
 - IV 専攻科に関する事項
 - V 学生指導に関する事項
 - VI 寮の運営に関する事項
 - VII 研究・社会連携に関する事項
 9. 議長まとめ
 10. 校長挨拶
 11. 閉 会

配付資料

1. 秋田工業高等専門学校運営協議会構成員一覧
2. 秋田工業高等専門学校運営協議会規則
3. 秋田工業高等専門学校運営協議会席次
4. 議事説明資料
 - 4－1 総務に関する事項
 - 4－2 国際交流に関する事項
 - 4－3 教育に関する事項（本科）
 - 4－4 専攻科に関する事項
 - 4－5 学生指導に関する事項
 - 4－6 寮の運営に関する事項
 - 4－7 研究・社会連携に関する事項
5. 学校紹介リーフレット
6. 秋田工業高等専門学校グローバル人材育成会リーフレット
7. 学校要覧
8. Campus Guide 2021
9. 秋田工業高等専門学校地域共同テクノセンター報／技術・研究シーズ集

秋田工業高等専門学校運営協議会 会場景



植松校長



大石議長



学校側説明の様子①



学校側説明の様子②



学校側説明の様子③



学校側説明の様子④



意見交換・質疑応答の様子①



意見交換・質疑応答の様子②



意見交換・質疑応答の様子③



意見交換・質疑応答の様子④



意見交換・質疑応答の様子⑤



意見交換・質疑応答の様子⑥

令和3年度秋田工業高等専門学校運営協議会議事録

日 時：令和3年12月24日（金）14：30～17：50

場 所：ANAクラウンプラザホテル秋田 シリウスの間

1. 開会

飯塚総務課長：定刻は2時半でございますけれども、皆様お揃いですので、少し早いですが、始めさせていただきます。

只今より令和3年度秋田工業高等専門学校運営協議会を開会いたします。私は本協議会の議長選出までの間、進行を務めさせていただきます総務課長の飯塚と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

委員の方々におかれましては、年末のお忙しい中、ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。今日は長時間となりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

始めに本校校長植松康より、ご挨拶を申し上げます。

2. 校長挨拶

植松校長：皆さん、こんにちは。校長の植松でございます。今日は秋田高専の運営協議会へ、年末でお忙しい中、また寒い中、ご出席をいただきありがとうございます。

この運営協議会は、2年に一度開催し、秋田高専の研究・教育、学校運営等についてご説明させていただき、それに対して委員の先生方からいろいろなご意見をいただき、それを今後の学校運営に反映させていきたいということで、開催させていただいております。

2年に1度ということで、今回は、令和元年に開催しました。その時に委員をお願いした方も今回委員として沢山いらっしゃいますので、あの後の2年間でどう変わったかという観点からもご意見をいただければと思います。

私が秋田高専に着任したのが令和元年でございまして、それから半年ぐらい経ったところで、この運営協議会がございました。ですから、あの時はどちらかというと前校長の運営について、ご意見をいただいたと理解しています。

それから2年経ちまして、今回は私が着任してからのいろんな方針に則った運営について説明させていただきます。私がこちらに来る前は、37年ぐらい大学に在りまして、高専のことはあまりよくわからなかったのですが、こちらに来てから、大きく2つのことに力を入れようと思いました。

1つは国際化です。秋田高専では英語教育に前から力を入れていましたが、それをもっと進めたいと。

例えば、後から詳しく説明があると思いますが、着任してから外国人教員を4人採用しました。その内2人は英語のネイティブに近い先生です。普段から英語に学生が触れられる、そんな環境を作りたいと考えました。留学の促進もしたのですが、残念ながらコロナでなかなかうまくいかなかったところもあります。学生を留学させるためには協定校を開拓しないといけないということで、2年間で4つか5つぐらいでしょうか、新しく協定を結びました。

それからもう1つは、研究力の向上です。高専の重要なミッションは地域貢献、社会貢献です。私自身、大学にいる時には企業との共同研究を随分やってきましたので、こちらの先生方についても、そういうのをどんどんやってほしいと思っています。あとで丸山先生から説明がある

と思いますが、産学協力会に加えて、グローバル人材育成会というのを作り、学生のキャリア教育と共同研究の推進を進めています。

主に国際化の促進、それから研究力のアップということで、いろいろとやってまいりました。そんなことも含めて、今日いろいろご意見いただければと思います。そして頂いたご意見を参考にして、さらに秋田高専を発展させていきたいと思っております。どうぞ今日はよろしくお願いいたします。

3. 運営協議会委員紹介

飯塚総務課長：ありがとうございました。それでは、本日まで出席いただいております委員の方々をお手元の資料1、こちらをご覧くださいながらご紹介させていただきます。

秋田県産業技術センター 技術フェロー 赤上陽一様
秋田工業高等専門学校同窓会 石井昭浩様
長岡技術科学大学 図書館長・地域防災実践研究センター長 大石潔様
秋田工業高等専門学校後援会 会長 金子智紀様
秋田県中学校長会 会長 工藤隆様
秋田工業高等専門学校産学協力会 会長 菅原雅史様
秋田魁新報社執行役員 経営管理本部長 田口清洋様
秋田市議会議員 成沢淳子様
秋田大学大学院 理工学研究科長 山村明弘様

4. 学校側出席者紹介

飯塚総務課長：続きまして、本校の出席者をご紹介させていただきます。

校長 植松康でございます。
総務担当の副校長 安東至でございます。
教育担当の副校長で教務主事の榊秀次郎でございます。
研究担当の副校長で地域共同テクノセンター長の宮脇和人は所用のため欠席となっております。
校長補佐で学生主事の本澤悟でございます。
校長補佐で寮務主事の小林貢でございます。
校長補佐で専攻科長の丸山耕一でございます。
校長補佐で国際交流担当の武井由智でございます。
人文科学系一般教科長の石塚政吾でございます。
自然科学系一般教科長の金田保則でございます。
事務部長の久留主豊でございます。
学生課長の葛西一宏でございます。
私は総務課長の飯塚博幸でございます。
その他総務課の事務担当者が陪席しております

5. 配付資料説明

飯塚総務課長：次に本日の日程を確認いたします。お手元の次第をご覧ください。

この後、会長の選出、会長挨拶ののち、議事に入ります。

議事の秋田高専令和3年度の活動については、それぞれの事項をパワーポイントで説明いた

します。Ⅰ～Ⅳまでを続けて説明した後、意見交換・質疑応答の時間をまとめてとっております。

その後 10 分ほどの休憩をはさみまして、16 時から議事の後半、Ⅴ～Ⅶを続けて説明いたします。そののちまた意見交換・質疑応答の時間をとっております。

それらが終わった後、議長のまとめ、校長の御礼で 17 時に会議を閉じさせていただき予定で。非常にタイトな日程となっており、恐れ入りますが、どうぞよろしくお願いいたします。

次に、資料の確認をお願いいたします。資料 2 枚目にあります配付資料一覧の記載順に確認させていただきます。

まず本日の次第。それから、

1. 構成一覧名簿
2. 本協議会規則
3. 席次表
4. 議事説明資料としまして、資料の 4－1 から 4－7
リーフレットとしまして、
5. 学校紹介リーフレット
6. グローカル人材育成会リーフレット
冊子としまして、
7. 学校要覧
8. Campus Guide2021
9. 地域共同テクノセンター報／技術・研究シーズ集

をお配りしております。

配付資料に不足等がございましたら、お申し出くださいますよう、お願いいたします。

なお、本日の会議につきましては、議事録作成のために録音・写真撮影をいたしておりますので、ご了承くださいますようお願いいたします。またご発言の際にはマイクをご使用くださいますようお願いいたします。

6. 会長（議長）選出

飯塚総務課長：続きまして、本日の運営協議会の会長選出につきまして、本協議会規則第 6 条及び 7 条に基づきまして、本協議会の議長を校長が指名し、お願いすることとなっております。

植松校長から議長には長岡技術科学大学の 大石委員にお願いしたいとのことですので、よろしくお願いいたします。

ここで、議長に委嘱されました大石委員より、一言ご挨拶をいただきたいと思います。

7. 会長（議長）挨拶

大石議長：大石と申します。2 年前も確か議長を仰せつかっておりますので、タイトなスケジュール、On time で議事進行できればと思っております。ご協力の程、お願いいたします。

飯塚総務課長：ありがとうございました。なお、ここからは大石議長に議事進行をお願いいたします。

8. 議事

【秋田高専令和 3 年度の活動について】

大石議長：それではここからは私が進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

本日の議題は、秋田高専令和3年度の活動についてとなっております。先ほど、ご説明ありました通り、前半のⅠからⅣまでのそれぞれの説明を行いまして、その後に意見交換・質疑応答をまとめてさせていただきます。

では、最初にⅠ．総務に関する事項として、安東副校長（総務担当）からご説明をいただきます。安東先生、よろしくお願いいたします。

Ⅰ．総務に関する事項（資料4－1で説明）

安東副校長：安東です。よろしくお願いいたします。

それでは、総務に関する事項として説明をしていきたいと思います。内容としては、組織、施設関係、整備関係、予算、そして学校行事という形で順番で説明をしていきます。

まず始めに組織でございます。非常にたくさん小さい字で書いてありますので、申し訳ありませんが、学校要覧の29ページにこの図と同じものが載っておりますので、そちらを見ていただいた方がはっきりと分かるかと思っておりますので、そちらをご覧ください。

校長とこの運営協議会との下、運営会議、そして副校長、校長補佐、それから各創造システム工学科長、系長、そして図書館長、情報処理センター長、それから技術教育支援センターの長、それから学生相談室長が、それぞれこのような形で下がっておりまして、そしてまたその下に同じように事務部長、事務系がぶら下がっている形の組織体系となっております。

続いて、施設についてご紹介いたします。

施設は2年前から学校の建物が新しく建ったとか、無くなったとかということは基本的にはありませんで、建物の名称は2年前と基本的には同じでございます。

ただ、学校の中の建物等の整備に関しては、大幅に整備がされました。まず令和元年度に教室等、一部はもう前からエアコン等が入っていたんですけども、それぞれの教室にまとめて、エアコン等の整備が本格的になされるようになりました。

これと令和2年度の機械系の空調工事、これが終わって、ほぼ全部秋田高専の建物内の教室と実験室には、夏場のエアコンと冬場は前から入ってますけれども、冷暖房が完備されるという形になっております。

それから令和元年度からライフラインの排水等の工事、秋田高専が建ってから50年を越えておりますので、その工事が令和元年そして昨年度2年がかりで大きく工事がなされて、現在ようやく終わって、掘り起し等がなくなったという、そういう状況でございます。

今年度以降ですけれども、インフラ長寿命化計画というのが進んでおりまして、秋田高専はこの後図書館、寄宿舍等が上位に該当しておりますので、うまくいけばこの後これらの工事が行われる可能性が残されているということでございます。

次に予算でございます。

予算ですが、合計で、約8億で学校の運営がなされております。そしてこれは令和2年度の決算、支出の決算額がそちらの方に出ておりますけれども、このような形で運営がされております。

具体的に予算の概要の収入に関してご説明をいたします。その次の形になりますが、こちらに施設整備補助金が一番大きいですが、次に大きいのは自己収入ですけれども、授業料・入学金・検定料等の収入があります。それから雑収入ですけれども、これは寄宿料であるとか、あるいは教職員の宿舍料とか、そういうのがこの雑収入の部分に入ります。

それから次に令和3年度の収入に関してです。授業料収入とそれから入学料の収入でございますが、これは過去2年の実績などによって、文科省から設定されてくるという形のものであります。

今年度はこのような形で運営を、この計画に基づいて運営をされているということでございます。

最後に行事についてご説明いたします。

昨年度はコロナの影響で4月それから5月の頭にかけて、学校が休校という措置がとられたりしましたけれども、今年度令和3年度に関しましては、通常通り秋田高専としてはスタートを切ることができておりまして、今のところ、授業等に関しては大きな影響は出ておりません。

ただ、ここにありますが、7月2日に東北地区高専体育大会という行事がありましたけれども、ご存じのようにコロナが全国的に広く、感染者が増加していたということもありまして、この東北地区の高専体育大会は、夏場においては中止という形になりました。

それから下の方、9月24日に国際教養大学といつも一緒にやっております、「English Village」、これも国際教養大学の方からの連絡もありまして、遠隔による実施という形に変更がなされております。

もう一つ後期に関しましてです。

10月9日、一番上ですけれども、全国高専プログラミングコンテストというのが秋田高専をメイン会場として行われております。

それから10月28日、全国の高専の体育大会、本来は夏場に行われるこれらの体育大会が、10月、11月感染者が減ってきた段階で行うという形になりました。10月28日からは野球の競技大会、それから11月1日に柔道競技が秋田県を会場に行われております。

この後ロボットコンテストなどが東北地区でも行われました。また、ここからはもう感染者が少なかったので通常通りの、予定通りのスケジュールで、それぞれの行事が執り行われております。

今後多分、このペースで感染者の増加がなければ通常通り、計画通りの行事を遂行できるものだというふうに認識をしております。

私からは以上です。

大石議長：安東先生、ありがとうございました。

続きまして、Ⅱ．国際交流に関する事項を武井校長補佐（国際交流担当）よりご説明いただきます。よろしくお願いいたします。

Ⅱ．国際交流に関する事項（資料4－2で説明）

武井校長補佐：ありがとうございます。武井でございます。よろしくお願いいたします。

国際交流に関する事項、3つに分割してお話いたします。1番目は国際交流協定関係、2番目が学生受入・派遣関係、3番目は国際交流促進等、諸々のことでございます。

まず始めに国際交流協定の覚書等ですが、まず1番、新規に締結したものといたしまして、これはコロナ禍のことでございますので、いずれも郵送の署名を行ったものであります。令和2年の8月にシンガポールにありますシンガポール・ポリテクニク。ここは英語の研修等で随分長いこと付き合いがあったポリテクニクでございますが、そこと交わしております。

続いて、韓国の京東大学と交わしております。下の写真でございますが、京東大学とそれから秋田高専、それぞれにおいて署名をいたしまして、その時の写真でございます。

10月メキシコ グァナファト大学、それから11月にメキシコ グアダラハラ大学、それぞれ交わしております。

以上の4つの協定は、どれも2機関同士の協定でございます。

更新の方でございますが、令和2年の5月にフランスのIUT（技術短期大学）というものと、それから東北及び北海道にある高専がコンソーシアムで協定をもっております。これの更新時期が去年の5月であったものですが、実際のところ、いろいろ多数の人が署名をしなくてはならなくて、今往来とそれから郵送がなかなか滞っておりまして、まだ作業中の状態です。

及び今年の7月にベトナムの中央地域工科経済水資源大学と2機関内での協定を更新することを合意しておりますが、これも郵便事情が悪いということで、作業中となっています。

今後の予定といたしまして、今年度中は来年の2月にフィンランド メトロポリア応用科学大及びトゥルク応用科学大という2つの大学と東北地区のコンソーシアム同士の協定を更新の予定でございます。

続きまして、学生の受入・派遣関係でございますが、まず最初は3年次編入の正規の留学生について報告いたします。参考までに令和元年度から載せてありますが、令和元年度2名入ってきております。2年度はもう既にコロナの時期でございましたが、3名入ってきております。ただし、内訳ベトナムが1名、マレーシア、モンゴルとありますが、ベトナムは、これは1年間日本で予備教育を受けてから入ってきた人たちで、一方でマレーシアとモンゴルは、本来は4月に入ってくるはずだったものなんですけれども、コロナの水際対策が、ご存じのとおりありましたので、まず遠隔授業でサポートをしたのち、後期の10月ないし11月にやっと入学できて、今は無事合流して学んでおります。

今年度も2名入ってきておりますが、1名のマレーシア政府派遣留学生については、同様に秋になってようやく遠隔授業から日本での授業に切り替わったところでございます。

次に、こちらは海外留学生の受け入れの内、短期留学生なんですが、令和元年度はこのように14名ほど受け入れておりましたが、令和2年度、3年度はコロナにおいて誰も受け入れることができていない状況でございます。

ただし、これは本校として留学受け入れをお断りしているわけではございませんで、秋田高専としては基本的に国及び地方自治体よりは強い規制はかけないという方針で、毎年希望者に対して受け入れの受諾はしております。実際には令和2年度において5名程度、それから令和3年度において4名程度受け入れの打診があつて、いずれも承諾はしているんですけれども、実際に今の日本の水際対策では、短期留学生が入国することはなかなか厳しいということで、それぞれの学生さんは辞退をしているというところでございます。

続いて派遣ですが、こちら残念なことです、令和元年度には56名程度派遣できていたところ、令和2年度・3年度は誰も派遣できておりません。これは政府、外務省の定める海外の感染症危険レベルが全世界において、最低でもレベル2で、不要不急の渡航は推奨しないというレベルになりますので、これに従いますと学生を派遣することはできないということになるかと存じます。

続きまして、国際交流促進に関する諸々の事柄ではありますが、大きなところだけ説明させていただきます。

①高専機構タイ高専プロジェクトでございますが、これは去年の10月に高専機構がタイの高専をもう作っておるところなんですけれども、そのプロジェクトの推進校を募集いたしました。本校はそれに応募して、採択されました。全国に10校そのような高専がございます。

去年度の活動としては、タイ高専で使う教材開発等に協力をして、継続しております。今後ですが、来年以降はタイ高専から毎年決まって4年生の1か月ほどの短期受け入れというのを、日本の高専が協力してやるんですけれども、秋田高専はそれの中心となって担当する全国6高専の1つになっております。ということで、今後4年生短期受け入れのプログラムを考えたり、実際に受け入れるという活動をしていく予定でございます。

②グローバル・エンジニアプログラム「海外技術研修」コース生の事前研修でございますが、これは次の教務主事からの説明でもう少し詳しくありますが、“KOSEN (高専) 4.0” イニシアティブ事業で、学生を海外に出すようなプログラムになっております。5年生の後期に卒業研究の代わりに学生を出す、海外に出すというのが、このプログラムの目玉なんですけれども、これにつきまして、去年の12月に創造システム工学科の第1期生4年生8名が希望を申し込みました。そしてTOEICのスピーキング対策テスト、これは全8コマあったんですが、留学先を選んだり、履歴書を書いたり、志望理由書を書いたり、添削指導をTeamsを活用して行いました。

この派遣の計画に対してまして、去年の1月にはJASSO奨学金がついております。ただし、コロナでございますので、渡航自体は今年の6月までに断念しております。

第2期生がちょうど入ってきたところで、7名が入ってきており、同様の事前研修を開始しております。こちらも今のところJASSO奨学金を申請している最中でございます。

③マッコーリー大学のオンライン遠隔インターン生の受け入れでございますが、オーストラリアのマッコーリー大学の日本語学科から遠隔インターンを受け入れしました。

インターン生にやっていただいたことなんですけれども、皆様のお手元に学校要覧がございます。これを半分ほど英訳していただくことができました。その他に英語版のリーフレットがあるかと存じます。英語版リーフレット自体はここで翻訳したものではございませんで、令和元年度に英語の先生に翻訳していただいたものなのですが、そういうものをもっと充実して、それから海外の大学生の年齢にも遡及できるような資料を作っていければいいと思います、したいと思います。

国際交流、簡単ですが、以上とさせていただきます。ありがとうございます。

大石議長：武井先生、ありがとうございました。

続きまして、Ⅲ. 教育に関する事項（本科）を榊副校長（教育担当）・教務主事よりご説明いただきます。榊先生、よろしくお願いいたします。

Ⅲ. 教育に関する事項（本科）（資料4－3で説明）

榊副校長：それでは、引き続いて榊の方からご報告させていただきます。

高専ですので、本科としては5年制です。5年で卒業してから大学3年の方に編入するということが多かったです。

あるいは進学する場合には、高専の専攻科に行く。あとは5年で卒業してから、学生数で一番多いのは就職の方ですね。5年本科を卒業してから就職するということがあります。

これも改めて確認になりますけれども、5年間勉強し、卒業時に準学士、さらに2年間高専の専攻科で学んで学士を取得し卒業する学生がいる学校であります。

今日のご報告内容なんですけれども、ここに書いてある内容なんですけれども、先ほど校長の方からお話がありましたグローバルエンジニア、国際化の教育に関しては2年前と違いまして、少し教育環境の方で、コロナ禍ということが影響してまして、インポート利用とか、遠

隔配信であるとか、そういった新たな取り組みをしたところを、ちょっとだけ重点を置きながら、ご説明させていただきたいと思います。

令和3年度本年度の11月1日時点での在籍者数です。平成29年から創造システム工学科になりまして、今の5年生までは全員全部新しい系ですね、機械系、電気・電子・情報系・物質・生物系・土木・建築系での所属になっております。

変わったことが2年前からあるかという、女子学生が比較的4系に均等に分かれるようになったというのがあると思います。

現在女子が全体820名の中の在籍で191名、23%在籍しておりますが、昔に比べると機械でも電気でも物質でも土木にでも、女子学生が在籍するようになったということがあると思います。

ここも確認になるんですけども、新しく29年から創造システム工学科になりまして、1年生は括りで入学させております。1年を括りで入学させて、1年から2年に行く時に系を選択します。じゃあ、1年生の時はどうやって教育的に系というか、各専門を勉強させているかということなんですけれども。

1年生の中に週1コマずつですけども、工学概論、基礎工作実習というような実験を体験したり、演習を体験したりするような授業を受講させております。

1年から2年で、各系を選んだからと言ってすぐ専門になるという訳でもなくて、今度は2年生、3年生におきまして、授業数は2年が週に1コマぐらい、3年生になると週に4～6ぐらいになるんですけども、各専門の基礎科目を2年と3年で受講させます。

3年生から4年生に上がる時に、コースの選択というのを行います。この時に昨今の流行かもしれませんが、学生が希望しているものを学ばせるということをメインに考えておりますので、コースの定員を設けずに、3年生から4年生が、学生が各コースを選べることになっております。

じゃあ、それで全部終わりかというところでもなくて、あとは今度各機械と電気・電・子情報と物質・生物と土木・建築によって、若干は違うんですけども4年生から5年生になる時のどこかのタイミングで、要は先生方を選ぶって言うんですかね、大学で言うと研究室を選ぶというようなことがあります。そのために専門科目の方を学生の方は受講し、4年生では基礎研究、5年生では卒業研究ということを行なっております。

なかなかちょっと全部が書ききれないんですけど、ここに書いてあるところがそうなんですけれども、新しい創造システム工学科になりましてから、複合科目であるとか、融合科目と言いまして、機械、電気・電子、物質・生物、土木・建築にとらわれないで、学生が他の系のことを学びたいというような時には複合科目、融合科目というような形で選択科目を受講させるような体制をとっております。

ここからは3ポリシーについてですが、本校は今年度機関別認証を受講しまして、その時に若干いろいろと変わっている所もあります。ここはほとんど変わってないんですけども、入学者の受入方針、アドミッションポリシーですけども、1番から5番までのこういった学生を受け入れることをポリシーとしております。

入学者の確保についてなんですけども、まず入学者確保の取組としまして、だいたい夏休みに入ってすぐぐらい、中学校で言うと8月の第1週、2週までいかなかな、第1週の土曜日から、日曜日にオープンキャンパスというのを実施しております。

参加人数なんですけれども、令和の元年度が482、2年度が182、3年度が443です。令和2年度がここまで低くなった理由は、ちょっとここに書かせていただいておりますけれども。

本来であれば高専に来校していただいて、どのような設備があって、どのような実験をしているか、どのような授業をしているかというのを見ていただきたいんですけども、なかなかコロナ禍でそれが実施できなくて、弊社マイクロソフトの Teams という会議システムを導入しておりますので、その Teams を用いて、高専と各家庭、あるいは高専と各中学校を接続して、オープンキャンパスというのを配信しました。その結果どうしても参加人数が低くなってしまったというのがあります。

あとは秋の進学ガイダンスに関しまして、令和2年度はやはりちょっと若干例年に比べると少ないのかなというような傾向がありました。

そういったことを反映してしまってというのがあるんですけども、入学志願者におきましては、残念ながら令和3年度は志願者が定員に満たずに0.94倍になっております。今の1年生ですけれども、定員以下で開校しております。

ここからが卒業認定方針なんですけれども、ここも2年前と何が違ったのかという話なんですけれども、ほとんど文言は変わってないんですけども。

例えば一番わかりやすいのは、Cの専門的知識の充実の所なんですけど、自ら学ぶということができるとか。次のDなんかだと、プレゼンテーション能力を有するとか。何々ができる、こういった能力を有するかっていうような、ちょっと語尾が全体的に変えたのが、ディプロマポリシーになっております。

カリキュラムポリシーにおきまして、そういった語尾が若干ちょっと変わってまして、なんかの科目ですって言うんじゃなくて、そういった専門科目を配置しますとか、そういったちょっと語尾が、機関別認証の審査を受けている時の事前のご指摘とかを反映して変えさせていただいております。ここもそんな形です。

ここからが私が教務主事になってからもですけども、校長の方から先ほど一番最初にお話があったように、国際化とあとは研究の推進という話があったと思いますけれども、そういったもののお話になります。前任の安東先生の方でいろいろと起案していただいて、採択された平成30年度より4.0イニシアティブ採択事業、ここから5ヶ月間の長期海外技術研修を核としたくさび型グローバルエンジニア事業です。

目的としましては、朱書きに書いてある所がそうなんですけども、早期技術者教育を受けた中学生を入学させる。

ですから、高専に単に入ってからって言うんじゃなくて、中学生に対して、高専として連携教育のみたいなことをちょっとやっていこうというのが目的であって、さらにグローバルエンジニアリングを育成するということを目的にしております。

じゃあ、グローバルエンジニアって、いったい何なのかっていう話なんですけども、研究成果を広く国際会議で発表・議論できる英語力を持っている。1人で海外出張に行けるTOEICスコア、600点程度の英語力を持っているような、こういった学生を育てていこうということを目的として行っております。

要は4つの系に捉われずに、中学校の段階から連携教育として、後から説明させていただきますけれども、エンジニアリングキャンプといった、中学生のための授業を高専の方で実施しまして、その後にグローバル基礎プログラムの英語授業を行い、グローバルプログラムの英語の授業を構成しております。

まず、グローバルエンジニア教育なんですけども、これは令和2年度の実施例ですけども、だいたい9月の3連休の土日に行います。英語教育だからと言って、英語ばかりやってしま

うとなかなか中学生も疲れてしまうので、現在の構成としましては、英語プログラムと自然科学プログラムを実施しております。対象としましては、将来エンジニアを目指し、入学を希望する中学生という形で行っています。

土日におきまして、自然科学やって、英語やって、翌日には英語やって、自然科学をやってというような2日間の構成で、構成しております。

まず最初に英語のプログラムに関してです。英語のプログラムに関しましては、目的としましては、中学の基礎固め、あとは高専の授業に対応できるようなレベルということをまず目的にしています。ただ、実際に担当している英語の先生方とかネイティブな先生とお話させていただくと、まずは英語に対する苦手意識というのをとにかく無くしたいんだと、というようなことを、強く英語の先生方には言っていただいております。その結果コミュニケーション能力や場合によっては海外で活躍する、海外で学ぶ、海外で発表することに興味を持たせたいというのが目的になっております。

ただじゃあ、中学生全員に1つのレベルで授業をやってしまうとなかなかきついの、現在ではグループを2つ分けて実施しております。英検の3級レベルの授業とあと英検の準2級レベルの授業を実施して、エンジニアプログラムを開設をしております。

次が自然科学プログラムの方なんですけども、こちらは、通常他にやっているオープンキャンパスとか、1日体験入学と何が違うんだっていうようなことを一番最初開講する時に問題にしまして。

そこで今ここに目的が書いてありますけれども、せっかく興味をもって来てくれるのであれば、技術者が行う一連のプログラム、学んで、座学でもいいです、本を読んでもいいです。実験して、それを観察して、考察するような。あとは一人で今なかなか社会に出てから研究するとか、技術開発というようなことはないので、グループで議論する。それをさらに発表する。そういった一連の技術者や研究者が行うプロセスとたった2日間ですけど、短い中で体験させようということを考えております。

あとは高専に入るといろんな装置であるとか、施設とかがありますので、単に座学や資料集から学ぶだけではなくて、実験や観察を通じて、学ぶことの楽しさとか、驚きみたいなことを体験させることを、目的に行っております。

全体の授業としまして、ここ何年か行っているのは、色・音・波とか、そういった波とか、そういったことを全体で学ばせて、その後に4テーマ、4つの班に分かれまして、空と自然と生物と色について学んでみよう。なんで夕日は赤かったり、なんで昼だと青かったりとか、を自分たちで調べさせたりとか、後例えば動物の種類によって、色の見え方が違っているよというような話とか。

あとBテーマなんかでしたら、「電波ってみんな見えないよね。でも見えない電波を使うことによって、実は星の誕生や生命の起源なんかを調べることができるんだよ」という、「電波望遠鏡についてみんなで調べてみない？」っていうようなテーマだったりします。

Cテーマ、これは色の種類や効果っていうことなんですけども、例えばわかりやすい例を言うと、「ごみ箱の色って何色が一番ごみ箱っぽいかな」とか、「色を変えると建物のイメージが変わるよね」とか。あとは「目の錯覚で、大きさとか形まで変わっちゃうよね」というような、そういったことをみんなで学んでみよう。

あとDは、色と温度の関係です。鉄とかでもそうですし、星でもそうですけども、温度が変わると色が変わります。「それってなんで？なんで色変わるの？」「じゃあ、その色ってどうやって測定するの？」「じゃあ、温度ってどうやって計るの？」「遠い星の温度ってなかなか計れない

よね」っていうような、そんなのを中学生に、「じゃあ、みんなで考えてみようか、調べてみようか」っていう形で。

ここ2年間ぐらいは学生にパソコンを渡して、先生方が各テーマに一人付いて、あとS A、補助の学生が1班に2人ぐらい付いて、みんなに「こういうの調べてみたら?」「こういうことはどう?」とかって言いながら、ワイワイガヤガヤ議論して、ポスター作って、発表するようなことをさせております。

受講者がコロナの時は29名で、今年度は36名です。また36名は、まだ誰も受験していないので結果は分からないんですけど、令和2年度の時は受講者29名のうちの24名、83%が受験しました。推薦が17名、学力7名で全員合格しております。

もちろん、160名の定員の内の24名というのは、そんなに多い訳ではないんですけども、受験生全員が合格していることから、一定の成果をあげているんじゃないかというふうに、本校においては判断しております。

ここがこの2つの写真が英語をやっている時の写真で、ここが自然の観察をしていて、一番右側がポスター発表しているところです。さらに最後「みんなもうちょい緊張しないでいいよ」って言いながら写真撮ると、ちゃんとまじめに起立して緊張して写真撮ったりとかしております。

あとは先ほど武井の方からも話がありましたように、グローバルエンジニア事業のグローバル基礎プログラムの方なんですけども、ちょっとお話をさせていただくと、2年生の実施している国際教養大学さんとのEnglish villageにおいては、対面での実施ができなくなり、3年生の希望者が行くシンガポールの語学研修もコロナ禍なので、先方から受入れ不可。もしもやるのであればWebという形にはなったんですけども、Webの場合には、本校受講者がゼロになってしまったというような、なかなか悲しい状況です。

ただ、それで止まっても仕方がないので、これ、ちょうど今年の1年生から導入したのが、1年生全員に計算問題、四則演算を英語でやらせるというようなことを行なっております。

ただ、これもネイティブの英語の先生が2名しかいませんので、ちょっとだけ工夫してまして、学内に、後ほど説明いたしますけど、遠隔配信教室というのを作っております。そこから一気に4クラスにネイティブの先生の姿、問題、音を配信しまして。

例えば一番簡単なのですと、「1+1はいくつ」とか、「10からいくつかを引いたら7になるんだけど、なんだ?」とかですね。いろんな遊びですね、半分。ですけど、「そんな難しくないよね」といって、「みんなでやったらわかるんじゃない?」っていうような形で、英語の授業を今入れたりとかしております。

あと、4年生には全員にTOEICの対策授業、スピーキング強化授業というのを行なっております。英検2級程度とTOEICスコア500点程度の取得を目指していると。

5年生が先ほど武井の方からもお話があったように、長期海外研修はこの2年間実施できておりません。

今年の4年生の希望者は現時点では確か2名追加されて9名ほどになっております。来年の後期から9名が海外に行けることを願っております。

グローバルエンジニアの育成チェッカーなんですけども、すいません、ここはプリントアウトしているものとここに投影している画面が若干ずれていますので、ご訂正をお願いします。現在の秋田高専の英語の4年生のTOEICの点数478点が英語科の先生に昨日ちょっと見てもらったら、英検~~3~~だったら、英検2級にしてほしいと言われたので、ここちょっと違っております(資料上は準2級となっている)。あと全国の高専の英語の平均点は、364点が英検準2級

レベルです（資料上は3級となっている）。

先ほど説明したように、1年生では全員、2年生は希望者、3年生は希望者、4年生全員、5年生は希望者という形の英語の教科、学生の国際化というのに取り組んでおります。

だったら、全部全員にすればいいんじゃないかという議論もあったんですけども、これは安東先生の時からよくおっしゃってたことなんですけども、波及効果が出ております。

実際、2年ぐらい前に、私ちょうど担任していたんですけども、非常に高スコアをとった学生が出てきますと、例えばこれ、笑い話に近いんですけど、「先生、誰それってほんとに500点超えたの?」「うん、なんか超えたから、今度何々こうなつたみたいだよ」っていう話をすると、「えーっ、あいつが500点超えたの?」って言って、他の学生がちょっと真面目になったりとか。

あとはここに書いてあるようなことなんですけども、低スコアの学生が、高スコアの学生に頼んで一緒に勉強に励むようになる。一部の学生だけあてても意味ないんじゃないかということは決して無いということが、一応実証されているんじゃないかというふうに考えております。

あとは、ここ、先ほど武井の方からあったように、令和2年度以降に新たに協定校の学校に関しては、朱書きでちょっと記載しております。

あと教育環境の整備なんですけども、令和3年度からe-ポートフォリオというのを導入しております。ご存じの先生方も多いと思うんですけど、ポートフォリオって、そのまま訳しちゃうと書類入れやファイルを意味する言葉になります。じゃあ、中身は何しているかというと、学生が作った課題であるとか、レポートであるとか、あとテスト、ミニテストでもそうです、定期テストとか、あとTOEICの結果であるとかというのを全部イメージで言うと、ファイリングできるようなことをしたいんです。

それで、単にファイリングしているとそのファイル忘れちゃうと、なかなかいつでも見れる形じゃないので、それを電子化したものというのを令和3年度より導入しております。

実際問題、昨年度はTeamsというポートフォリオとOneNoteというポートフォリオと紙ベースのポートフォリオの3種類を「どうぞ各先生方、各学生自由に使ってください」という形で行っております。それを検証しまして、来年度からはこれ、LMSとして、Learning Management Systemというんですけども、いつ誰がどんな課題を出したのか。その課題を学生が見てるか見てないか、その課題を学生が提出したかどうか、その提出した課題に対して教員が評価をしているか、コメントをしているかというのを、いっせいのせいで一覧で見れるようなシステムを令和4年度、来年の4月から入れていこうというふうに考えております。

あと先程ちょっと1年生の英語教育でも説明しましたように、学内に遠隔配信教室というのを整備させていただいております。これによってなかなかほんとに実は全部ということではないんですけども、一人の先生が4クラスに同時に授業を配信できるようなことっていうのを考えております。

あとは、弊校の授業とは若干違う点ではあるんですけど、学外、その遠隔配信教室を用いまして、学外の配信とかも行っております。コロナ禍におきまして、英語の先生、海外の英語の先生が来日できないというようなお話をいただきまして、中学英語のサポート授業というのを開始しております。

弊校の外国人教員、あと留学生の人材を有効利用して、かつ地域貢献を通じて、中学、中学教員に秋田高専をPRすることを目的として行っております。

令和2年度は上小阿仁中学で実施して、令和3年度は本年度は上小阿仁・阿仁・鹿角中学さんの方にも実施しております。

今年さすがに3校でやっている、「高専さんだから理科の授業、物理とか化学とか、生物の授業ってできるの？」っていうような、逆に声をかけていただいて、今年もちょうどこの前ですけども、そういった授業も配信したりとかしております。

あとちょうど2、3日前なんですけども、上小阿仁中学の令和2年度の、この英語配信授業というのが、上小阿仁中学の教育委員会の方で評価していただいて、A評価をいただいて、「是非今後もよろしくお願いします」というご連絡をいただいたりとかしております。

あと、ここも教育環境なんですけども、どうしても昨今人口が減っておりますので、志願者数が減ってきます。そうするとどうしても学力が若干落ちてきます。それをなんとかフォローするということを考えておりまして、学習支援室というのを令和3年度より立ち上げました。目的としましては、学生の進学支援及び学力向上を目的としております。

まだなかなか基礎学力のフォローアップまでは回ってないんですけども、先行して一部の先生方が、ボランティアな形で実施していただきました。東北大学進学ゼミナールというのを去年より開講しております。この開講をしたことによりまして、機械でも電気でも物質でも環境の先生方でも、複数の先生に、別に東北大学に特化している訳ではないんですけども、学力で受ける筑波大学さんとか、横浜国立大学さんとか、東北大学さんの問題とかでわからないこととかがあったら、いろんな学科とか、学系を問わずに学生が集まって、週2回学ぶ場を設けたりとかしております。

あと今年度より3年生対象に進学就職キャリア教育講演会というのを学内で開催しております。実際今年度は東北大学に合格している5年生、専攻科に合格している5年生、新潟大学に合格している5年生とか、あと就職の体験なんかを学校全体として、学習支援室として、3年生に聞かせて、「ほんとに基礎的なところがわからないのであったら、わからないということをちゃんと声上げて、手を上げて、なかなか言うのは恥ずかしいかもしれないけれど言ってください」と。「言ってくればサポートしますよ」と。あと逆に「進学したいんだったら、それも声を上げていってください」と。「サポートしますよ」というような体制を徐々にとろうとしております。

進路状況に関しましては、そんなに大きく変わっていることはないです。ただコロナ禍におきまして、親御さんの志向が変わりまして、「こんなコロナがある時に都内に出る必要、ないんじゃないの？」と、「就職する必要はないんじゃないの？」というのがちょっとあって、例年よりは若干進学が増えたとか、県内への進学、県内への就職というのが増えたというふうに感じております。

これが進路状況なんですけども、この括った所は何かというと、県内なんかでしたら、圧倒的に秋田大学さんとかですね、に行きたがっていると。あとは高専ですので、あと秋田の地の交通の便とかもあるかもしれないんですけども、新潟大学さんとか、長岡技科大さんなんかは学生さんに人気がありますと。ちょっとそういったお話です。

これで報告を終わりにします。どうもありがとうございました。

大石議長：榊先生、ありがとうございました。

続きまして、IV. 専攻科に関する事項を丸山校長補佐・専攻科長よりご説明いただきます。丸山先生、よろしくお願いいたします。

IV. 専攻科に関する事項（資料4－4で説明）

丸山校長補佐：それでは専攻科に関する事項を報告させていただきます。

専攻科は、平成6年に設置され、生産システム工学専攻と環境システム工学専攻の2専攻体制をとりました。それぞれ、本科の2系ずつが融合した、定員8名ずつの体制となっております。

今年度改組を文科省から認可され、令和4年度から新体制で行うことになっております。改組の背景ですが、2年前ちょうどこの運営協議会が開かれた後、2年前の12月ごろに高専機構を介しまして改組の内容を相談し始めました。実際に令和2年度におよその内容が固まり、そして、令和3年度の4月に文科省の方に申請いたしまして、8月に認可されたという背景になっております。

文科省の方からの注文、すなわち改組を行うにあたってポイントがあります。まず1つは、高専のミッションがそもそも地域貢献ということですが、「地域性を前面に押し出すように」ということです。

これに関しましては、これまで当校でもCOC+等の授業を介しまして、地域貢献、それから地域への人材輩出というものを続けてきました。リーマンショック以前は、例えば地域への就職率が20%以上ございましたけれども、その後は、良い時で10%、悪いときは5%ぐらいというようなことが続いておりました。そういったことを解消しなければいけないということで、地域性を教育カリキュラムの中に取り込んでいかなければいけないといったようなことが切実な問題としてあげられます。それから、冒頭で植松校長の方から、研究力の向上といったことがございますけれども、高専で研究力を向上させるためには、専攻科の教育の高度化というものが必要になってくるといえます。

もう1つが、本科と専攻科の接続といった問題がございます。平成29年度に本科の改組をしておりますので、ちょうど5年後の令和4年度が、新課程での卒業した学生が専攻科に入学する初めての年度ということとなります。そういった接続もさることながら、もう一つ専攻科というのは、大学改革支援・学位授与機構の方から認定されている専攻科であるということがあります。その認定専攻科というのは、本科の3年生、4年生、そして専攻科の1年生、2年生、その4か年でのカリキュラムになりますので、そういった意味でも本科と専攻科の接続を図らなければいけないといったことが背景になっております。

また、「地域性」ということなのですが、それは我々学校が勝手に思う地域性ではなく、ほんとに地域の産業界、地域の皆さんからの意見を聴取した上での地域性といったものを考えなければいけないということになります。そこで、産学協力会の会員企業様からアンケートを収集した上で、今何が求められているか、産業界のニーズは何か、そしてそれに対して教育界が何をしなければいけないかといったようなところを、エビデンスとすることによって改組を行なったといったことが背景になっております。

その結果、1専攻にいたしました。そしてその下に4コース、さらに副専攻といったような体制に変わっております。1専攻にしたというのは、従来の2専攻という枠組みでは、地域のニーズに対応することが十分にできないといったところ、それから4コースの位置付けというのは、先ほど申しましたように、本科との接続も考えまして、認定専攻科ということも踏まえ、取得学位の区分として適当であろうと考えております。

またさらに地域のニーズに具体的に対応するためには、4コースでは対応できませんので、それを副専攻という形で対応させるといったようなことが背景にあります。副専攻については、また後で説明することになります。

以上の事情から、専攻科の人材育成像として「融合とデザイン」、「挑戦するマインド」、「オープンイノベーション志向」といったところをあげて、改組の認可が下りました。

教育の特徴は、『教育の目的は、知識・技能を学んで修得する能力だけでなく、学んだ知識・技能を実践・応用する力、更には自ら課題の発見・解決に取り組み、多様な他者と協働しながら新たなモノやサービス、コトを生み出し社会に新たな価値を創造する力を育成』ということになっております。

教育の手段は、本科5ヶ年の後の特例認定専攻科2ヶ年、そこで学士をとります。その学士の分野が4コースに分かれているということになります。

カリキュラムといたしましては、一般科目と専門科目に分けられることになりますけれども、一般科目で特に情報分野、それから工学の基礎となる物理学に重点化を置いたということと、今後文理融合の技術開発といったものも必要になるということで、リベラルアーツに係る内容を充実させました。

更にその上に専門科目といたしまして、各コースの融合化を図るということで、他コースの科目も学べるような概論科目、総論科目といったところを設置しています。また、専門科目をコース専門科目と関連専門科目に分けております。コース専門科目というのは、自コースの専門性を深化させるものを、必修科目としてあります。関連専門科目というのは、自コースの専門領域に幅を広げるための選択科目となっております。

更に、先ほど申しましたように、地域のニーズに対応する副専攻といったものを全部で11個設定しております。それぞれのコースで、関連の深そうな主な副専攻を資料に示します。

このように、学生は、それぞれ4コースのどれかに所属することに加え、副専攻にも所属するといったことで、基本的には授業科目としてましては、副専攻では5科目の必修科目を設定いたしますが、副専攻の中で、卒業研究（専攻科ではこれを特別研究とよびます）特別研究に従事します。その際に、異分野の学生との交流、異分野の指導教員との交流といったようなことも行いまして、社会に出る前にそういったチームでの研究活動といったものを充実できるような体制をとることになります。

いわゆる副専攻を別の言葉で置き換えれば、研究プロジェクト、もしくは教育プロジェクトということに位置付けております。

また、こういった学内だけのカリキュラムだけではなくて、学外の知を注いでいただくということで、これまでも行っていたいておりますが、秋田高専の産学協力会の会員企業様に加え、詳細は研究担当の方でお話ししますが、秋田高専グローバル人材育成会というものを創設いたしまして、県内外の企業様の協同体制が秋田高専にはあるといったことが、一つの強みになると思います。そういった会員企業の皆様、非常勤講師等々に講演会・研究会・研修会等を行っていただき、そこに学生を参加させるといったところでも、チームというものを意識した教育カリキュラムという図式になっております。

入学者選抜の状況です。今年度初めて令和4年度、初めて専攻、1専攻での入試を行いました。それまで2年前からになりますけれども、生産システム工学の方は倍率が高く、環境システム工学専攻の方は倍率が低いといったようなことがございますけれども、今回改組後の初めての入試においては、1専攻ということで倍率も1.6倍となりました。これの事情は、先般皆様にご存じのように、コロナ禍の影響にということで、県内にそのまま残りたいという学生が多いということと、今回改組の認定の時期が8月だったということで、その後に入試を行ったという事情もありまして、少々人数の管理が難しかったというのが実情でございます。実際に昨今、定員管理という概念が非常に重要になっておりまして、今後定員を0.7倍から1.3倍程度に管理しなければいけないといったことをこれから検討することになります。英語の試験はTOEIC

のスコアを換算する、それから専門科目は、これまで12科目から3科目を選択するという、学生にとっては試験対策が非常に重かったんですけども、それを4科目に軽減するような方法で行っております。また、本科から専攻科への進学以外にも社会人の特別選抜、これも今後、今現在国策だと思いますけれどもリカレント教育といったものが、今後高専の専攻科の中で実動していくように考えていかなければいけないと思います。

進学、就職状況です。先ほども教務主事の方からお話ありましたが、進学率が上がっているというところもございます。進学先、就職先ですが、残念ながらちょっと地域への人材といったところには至っておりませんが、図に示した大学や企業に進学、就職しています。環境システム工学の実績は、在籍学生数が少ないため、進学先、就職先件数が少なくなっています。

専攻科自体、先ほども申しましたように学位授与機構の方から認定制度のもとで、学位を授与しているといったこともございますけれども、本科と同様に機関別の認証評価を今年度受審し、今結果を待っている途中です。

それから認定専攻科における教育の実施状況の審査ということで、通常これは、5年に1度受審しますが、今回は改組があるということで、5年を経ず今年度に受審しました。その結果、認定専攻科としても認可されております。また、実際に授業を担当する教員に対する、また特別研究を担当する教員に対する特例認定も審査を行いまして、ほとんどすべての教員が認定されているといったような状況を維持することができております。

最後になります。これから令和4年度に新課程が動き出す訳ですけれども、そこにあげた4つの項目を、これからの重要課題として、具体的に進めていかなければいけないと考えております。

まず1つは、先ほどから何度も言っております地域産業・社会への貢献ということでございます。そのための体制が副専攻だということは、すでに説明した通りでございますけれども、これは第6期科学技術イノベーション基本計画の目標でもあります Society5.0 の実現でもありますし、人材育成といったところで、高専教育が強みを出せるところではないかといったところで、本校の専攻科、副専攻制といったものが、それを、その実現を後押しできるのではないかというふうに考えています。

2つ目のグローバル人材ということで、先ほど学校側からの説明でグローバルエンジニアといった話もございますけれども、そういったグローバルな視点を持つ人材を、地域に輩出できるようなことを、今後進めていければよいと考えております。

3番目、特例適用認定の維持ということで、このためには科研費等の基盤研究、それから社会実装研究、そういったものを両軸としてやっていくということが必要となっております。またその時に先ほど申しましたグローバル人材育成会の会員企業様との共同研究、また、研究を通した教育といったものを重点化させて、そこで副専攻というものを実際に活用・運用していくといったことが、必要になってくるのではないかと考えます。

最後に、地域人材の育成です。本科、専攻科の学生を育成することはもちろんですけれども、過去に本校を卒業して、社会で活躍する卒業生が、もう一度専攻科に戻ってくるといったようなリカレント、もう一つは工業高校を卒業した方、若しくは専門学校を卒業した方が、実務を積んだ上で高専の専攻科にリカレントとして教育のプロジェクトに入っていただくといったようなことも、実際可能なのではないかと考えております。

以上となります。

《意見交換・質疑応答》

大石議長：丸山先生、ありがとうございました。

それでは、これまでⅠ～Ⅳの説明に対して、ご質問・ご意見ございましたら、ご発言願います。すでに予定時間超過してしまっておりますが、ご質問・ご意見は遠慮なく時間取りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

石井委員：説明ありがとうございました。石井と申します。グローバル人材の育成ということで、英語教育に力を入れているということで、これ非常に以前の高専では考えられなかった姿ということで、素晴らしいことだと思っているんですが。例えば、グローバルエンジニアリング育成事業（８）。

大石議長：教務主事の榊先生への質問ですね。

石井委員：そうですね。この中で、こういったような一連授業を通して、ポジティブな考えとネガティブな考えがあるんですが。

例えば、このようなカリキュラムを増やすことによって、犠牲にした、要は、時間数はそんなに増えていないんでしょから、やはり犠牲にしたカリキュラムとその影響をどのように考えているかということ、とりあえず技術的な、そういうものを落とさないようにした、ネガティブな所を落とさないようにしたような工夫点があれば、教えていただきたいと思います。

それからその次の 10 番、グローバルエンジニア育成事業。ここにいろいろとあるんですが、この生徒さんの行きたいといったような国の、選抜は当然あるのではないかと思いますけども、そういったような基準があれば、あるのかということでございます。

続きまして、専攻科に関する事項への質問でございます。

大石議長：すいません。1 つずつ、教務担当の方からお願いします。

榊副校長：それではちょっと座ったままの回答をお許してください。

まず、犠牲にしたプログラムと、授業があるかということに関しましては、カリキュラム上は犠牲にしているものは一切ないです。学生の方にはよく話をするんですけども、1 日 30 分でもいいから、日曜日から金曜日まで英語をやってほしいと。それで 1 月に 10 時間英語を勉強できますよと。土日には、たまった数学とか、物理とか、化学とか、要は 1 日に 1 時間でも 2 時間でも根詰めてやったらできる科目というのは専門科目だと思いますと。だから学生の方に英語ばかりやれという指導はしておりません。カリキュラム上もそんなに負担かけておりません。

ただ、犠牲になっている所としましては、せっかくそういうご質問いただいたんで、正直なお話をさせていただくと、入学時に一般動詞も be 動詞も分からないとか。あとは go の過去形は goed だというような、英語力が低い子たちでもどうしても入学しております。

今回はちょっとここには記載しておりませんが、来年度以降、中学時代の英語力がなかなか問題がある子たちを救うための今プログラムをすったもんだしながら、英語科も交えて、学校全体でフォローアップしようとしております。それがまず 1 つ目の答えになります。

あと 2 つ目のご質問に関しましては、グローバルエンジニアリングの海外の長期インターンシップに行く参加学生の基準なんですけれども、一応 TOEIC で言いますと、一応 450 点に現行

ではなっております。これは安東先生の方で策定された時には、だいたいその TOEIC450 点ぐらいというのが、4 年生全体で 5 ～ 60 人いたという基準になっております。

ただですね、英語科の先生とか、あと国際交流担当の武井先生なんかと話していても、できれば 500 点以上にしたいという話が前々からいただいております、今の 4 年生ですと、実を言いますと 500 点以上でだいたい 5 ～ 60 人に達してますので、校長先生とまだ相談しているところなんですけれども、来年度以降 500 点以上に改定していこうかなというふうに考えております。

あと最後のご質問ですけれども、学生がどこに行きたがっているかという話に関しましては、学生自身はフィンランドとか、あとシンガポールとかに行きたがったり、フランスとかに行きたがったりはするんですけれども、行く国によって費用が変わりますので、誰一人も海外に送っていないので、なかなか答えがないんですけれども、保護者が入ってきますと、行きたい国と行ける国のちょっとギャップがあるというようなところがあると思います。

武井先生、よろしいですかね。何かフォローがあれば、お願いします。

武井校長補佐：ご質問ありがとうございます。まず選抜のプロセスなんですが、本来的な設計ですと、グローバルエンジニアプログラム、本校 8 つコースがあるんですけれども、だいたい 2 人ぐらいずつ来てほしいということで、16 人ぐらいには構えをしております。ところが今この状況ですので、先ほど報告させていただいたように初年度だいたい 8 人ぐらいで、今年度 7 人から 9 人ぐらいということで。

実はたくさんの学生を選抜ということではなくて、行きたい所を決めるところで、まず一番大事なのは、まずどこの国というよりも、そこの大学に行って何が学べるかが大事ですので、私のセクションの最後で説明させていただいた、海外技術研修のための事前研修というところで、ここではこういうことができるということを詰めていって、だいたい今は学生の数の方が少ないですから、枠としてはだいたい今のところは行きたい所に行けるという状況です。

ただし、先ほど説明ちょっとあったんですけれども、ヨーロッパは、それからシンガポールも語学のリクワイアメントが高いですから、そういう所に学生さんは TOEIC のリーディング、リスニングは 500 点以上、プラスしゃべる、スピーキング対策テストも我々やっておりますけれども、それでよいスコアを得た人を基本的にヨーロッパとか、シンガポールに本格的に指導しております。

石井委員：続きまして、専攻科の丸山先生の方にご質問いたします。

教育カリキュラムプログラム等を拝見いたしまして、素晴らしい理想的な、私も高専卒業しているんですけれども、おとぎ話のような素晴らしい、理想的なカリキュラムだなと、こう考えて拝見しておりました。

そういったような中で、最後専攻科への課題というところがありまして、後ろの方に上げられている地域産業・社会への貢献というところを考えた時に、なかなか地域産業の方のレベルとして、ミスマッチと言いますか、当初はミスマッチが起きてしまうのではないかなといったようなこと、ここを危惧しております。

長期的な視点で行けば、地域産業の変革まで求められているようなカリキュラムと、このままでは地域に人は落ちないだろうなと思っております。

このような人達が地域の会社へ入っていただいて、会社そのものを成長していただける重要

な人材となっていかなければならないなと。そういったような二面性もあるなというふうに、これは感想でございますが、感じさせていただきました。以上でございます。

大石議長：何かありますか？専攻科の先生の方から。

丸山校長補佐：今の石井さんのお話に関連して、あとでグローバル人材育成会の方で、その答えにもなるかなと思いますので、本日研究担当副校長の代わりに私がしゃべりますので、またその時に話したいと思います。

大石議長：他、ございますでしょうか、ご質問・ご意見。

赤上委員：産業技術センターの赤上です。ご丁寧な説明ありがとうございました。

ちょっと重なるかもしれないんですけど、武井先生のご発表の中で、国際交流についてということで、協定校をどのような設定方法で選ばれているのかというのをお聞かせください。

武井校長補佐：包まずにお答えいたします。令和2年度に4つ新しく協定校を作ることができたんですけども、やはり最初のきっかけというものが必要でございます。そこにあげている内のシンガポール、まず今の段階では先ほどグローバルエンジニアリングの関係で、まず協定校をとにかく増やしたいという需要がございます。そこで結べる所はどこでも、というのが本音であります。

その時に1つ難しいのは、海外の教育機関というと大学が多いんですけども、本校はカレッジですので、バチューラまではあるけど、大学院はないです。そうすると向こうの大学の方には、喜んでいただけるということもなかなか難しいですので、できるだけいろんな伝手を辿って、結べる所はどこでも結んでいるというのが正直なところです。

シンガポールはポリテクですから、もともとちょっと高専と似た所がありまして、準学士的な学位を出している所です。その他、京東大学は校長の伝手がありました。それからメキシコの2大学は、校長が申し上げたところの、外国人教員雇用という話がありましたが、その出身校に渡りをつけてもらって結んだ所です。

今後できるだけそういう伝手を活用して、増やしていきたいと考えているところでございます。

赤上委員：ありがとうございました。

最後の方だと思うんですが、ホームページに対する英語版については、触れられてなかったような。今後作成される計画等は。

武井校長補佐：実は英語版ホームページございます。ございますが、正直言うとあまり頻繁な更新をかけられておりませんし、やはり海外の大学等に比べると、あまりそこもクオリティーに達していない所でございます。

そのようなこともあるんですけど、まずやはり基本的な素材というものが必要でございますので、翻訳を、まず例えばこういう学校要覧的な、なかなか内容が簡単には変わらない所から出発して、できるだけ留学生を呼び込めるような、こういうようなページを作っていきたいと

考えております。ご指摘、ありがとうございます。

赤上委員：逆って言う訳ではないんですけども、今いわゆるオンラインの流れからすると、ネットワークの流れからすると、必ずホームページをパッと見る訳なんです。ですので、ホームページのクオリティというのは、できれば見栄を張っても高めた方がいいんじゃないかなと思います。

武井校長補佐：ご指摘ありがとうございます。

赤上委員：それと丸山先生の中で、6 ページに、この表で県内就職率、一番下の行でございます。令和元年と令和 2 年の県内就職率が半分になってるとというのは、何か特徴的なものがあるのでしょうか。

丸山校長補佐：環境システムの方は人数が少なくて、こういうことになっているのかなと思います。また令和 3 年の生産システムの方には、ちょっとすいません、この理由は私、答えられません、すいません、申し訳ないです。

赤上委員：私も県内企業さんを、よく回らせていただくんですけども、その中で必ず聞かせていただくのは、「来年度どのくらい大卒者が入るんですか？」みたいな、「高卒者が入るんですか？」というのを聞くと、その会社の景気動向がわかるんですね。その中で必ずと言っていいほど、「高専生が欲しいんですよ」っていうような企業さんもたくさん見かけるといいますか、お聞かせいただくんですけども。

こう言っちゃ怒られちゃうかもしれないですけど、我々が企業訪問する相手っていうのは、県内企業さんでもかなり頑張られている所が多いんです。そういった所で、高専生が、是非とも県内企業を慣れ親しんでというか、フレンドリーな関係になっていただいて、例えばそのツールとしてインターンシップというのがあると思うんです。そういったものを積極的に取り入れるという、非常にタイトな時間の中でというのもあるかもしれないんですけど、ということをご計画していただくと県内での就職というのは少しずつ増えていくんじゃないかなというふうに考えるんですが、その点はいかがでしょうか。

丸山校長補佐：もうおっしゃる通りなんです。これまでも県内企業知る会等々で、企業の方が実際に産学協力会の企業の方来られて、学生との個別面談をしたり、して、インターンシップも県内割と行ってるんですけども、どうしてもそこに繋がらないといったような事情がございます。

これもちょっとグローバル人材育成会と絡むので、ちょっと後でお話させていただきたいと思いますので、すいません。

あと先程のお答えできなかったんですけども、やはり進学率が最近高くなって、そのあたりもございます、というところがございます。

赤上委員：もう 1 点、ちょっと戻っちゃうんですけども、4 ページ目の教育プログラム、カリキュラムの所で、4 つのコースがありますが、どうして物理工学コースに I o T、A I、デジタルっていう、いわゆるプラットホーム的な教育が、ここだけどうしてないのでしょうか。

丸山校長補佐：どういうふうにしたかという説明をさせていただきますと、まずは先ほど申し上げましたように県内企業様からどんなニーズがあるか、逆にシーズがあるからそれを発展させたいといったところを県内企業様のアンケートを基に考えました。

それから実際それを我々教員が行う訳で、例えばその分野をすべて網羅するということは不可能でして、今いる教員がそれにどのように対応できるかという観点で決めています。そうなると今おっしゃったようなことも起きてしまいます。

さらに先ほど全く言い忘れちゃんですけども、この副専攻というのは5年をめぐりにリニューアルしていこうと考えております。そうすればもう一度企業様もそういった視点を我々把握できますし、5年経つと教員も入れ替わっておりますので、また新たな展開が期待できるんじゃないかなというふうに考えております。

赤上委員：ありがとうございます。IoT、AIなんて常識になっちゃうと思うので、できれば特別にとらなくても身に付くという形にしていいただければ、大変ありがたいんじゃないかなと思います。

工藤委員：工藤と申します。中学校の立場から一つ、グローバルエンジニア育成事業について、お聞きしたいと思います。

高専の志願理由の中に、アドミッションポリシーに自分は適しているということで行くわけですが、その中に英語が得意だからということで高専を目指そうというのはあまりない。やはり理数系が得意なので、自分は工業系の勉強をしたいというふうに行くわけですが、高専が英語教育に力を入れたと思って、この募集が来た時にびっくりしました。

これから先、例えばアドミッションポリシーの中にも、グローバルエンジニアを目指す、なんていう項目を入れつつその方向に向かって行こうとしているのか。それとも高専を目指す、そういう理数系が得意、もしくは頑張りたいという子どもの中からの一部、そういうグローバルエンジニアの方を目指す、子ども達も必要とするということなのかという辺り、ちょっとお聞かせいただければありがたいなと思います。

榊副校長：学校全体で議論している話ではないんですけども、教務のスタッフの中では、今先生のおっしゃったことは議論しておりまして。ただやはり入学時には理数系とか、技術とか、ものづくりに興味がある学生がほしいというのは一切おぼれておりません。

ただそう言いながら、これは私個人の体験になるんですけども、10何年前に民間にいた時から思っていることなんですけども、今日本国内の人口が減っておりますので、誰でも今更そんな話聞きたくないよという話かもしれませんけど、今まで1億個売れてたものが、人口減ったら9000個になって、8000個になってというふうになります。

元いた会社の時にも、たかだか製品仕様書だろうが、データシートだろうが、工程書だろうが、最初の頃から全部工場だろうが、研究所だろうが、もう日本語と英語と両方作っていくというようなのが、10年ぐらい前から当たり前になってきているような気がするんですね。

やはり日本国内だけで物を作っていたり、ものを売ってても、もう成り立たなくなってる。であれば、全員がということは全然考えてないんですけども、一部適性のある入学者においては理数に興味を持ちつつ、英語力も伸ばす機会をあげてあげたいよねっていう議論はしております。

ですので、別に「英語ができないと高専来ちゃ駄目」とか、「高専、英語が苦手だったら行か

ない方がいいよ」っていうことでは、決してないというふうにご理解いただければありがたいです。以上になります。

大石議長：すいません、だいたい時間が押しちゃったんですけど、他にありますでしょうか？

山村委員：やはり教育機関として、入試、非常に重要だと思いますけども。志願倍率が令和3年度0.94倍ということで低下傾向にあるようでございます。質問としては、これが秋田高専のみの傾向なのか、それとも全国すべての高専における傾向なのかということと、やはり秋田高専さんとして、この改善をどのように考えられるかということを少しお伺いしたいと思います。

榊副校長：まず一つ目なんですけども、高専全体での倍率は落ちておりません。ただ顕著になっているのは、総務省の人口統計というか、どのように減少しているかという統計が出ておりますけれども、それで顕著に人口が落ちている県にある高専においては、正直なこと申しますと、他高専の名前まではあげませんけれども、弊校が1割切っている時にも、他高専でも4校ぐらい、やっぱり人口が減少している地域は減っております。

ですので、県全体での減少なんかが影響が出ているのではないかというふうに考えております。

あと2つ目のご指摘に関しましては、副校長の安東がずっと言っているんですけども、秋田県内だけではなくて、隣県とか、もう少し広げた形で、お互い取り合いになるところも否めないと思うんですけども、広報活動などを行っていくということと。

あとは中学校の方から見た時に、高専の入学してからの退学率が高いとか、留年率が高いというようなことがあるので、そこをなんとか食い止めたい。でも教える授業の内容を変えたくないといったことで、今更ちょっと遅いと言われれば、「遅いよね」って言うのは認めますけども、学習支援室なんかを立ち上げて、もう少し入学してからでも面倒見のいい、見捨てない学校だということを、単に声を出すのではなくて、保護者であるとか、入学者に分かっていただけるようなカリキュラムとか、サポートを実行していこうというふうに考えております。以上です。

山村委員：ちょっとだけ追加で質問なんですけど。例えば、今グローバルエンジニアリングなどの取組、非常に素晴らしいと思うんですけども、これが中学校の生徒さんたちにどのように映っているかとかの調査とか、入学者への調査なんかを行なっているんでしょうか。

榊副校長：アンケートは全部行っております。ただ結局アンケートでの質問項目で楽しかったかどうかとか、ためになったかどうかというふうに書いてしまうとあまりネガティブなことは聞けないので、毎年アンケート専門部会というのを立ち上げまして、そもそもこの質問でいいのかとか、この結果というのはどういったことかなるのかというのを、学内でフィードバックかけて、改善につなげるように努力はしております。

ただ、なかなか改善までいってないのは認めざるを得ないです。以上です。

山村委員：どうもありがとうございます。

大石議長：すみません、休憩なしでいいですかね。どうぞ。

田口委員：田口と申します。資料の4－3の方、教育に関する事項の6ページですね、ここの上の系の構成について、これに関連してですけども。

1年生で入学時は大括りで入学して、2年生の時にこの4つの系を選択して進路を進むわけですけども、ここの段階で希望調査をされると思うんですが、希望通りに進路、系の選択をされているものかどうか、その事情についてお伺いしたいと思います。

それと40名程度という定員設定がなされてますが、いわゆるこの枠のどこまで許容されているのか。下限と上限当たりの目安というのがあるのかどうか、についてお伺いしたいと思います。

榑副校長：おそらく2つのご質問に1つで答えられると思うんですけども。

まず希望調査というのはだいたい1年生になりまして、3回行っております。そこで担任の先生とかを通じて、学生との面談を行ったりとかしております。その希望調査の結果も、学生の方にはフィードバックさせております。

じゃ、希望通りにいっているかという、一つ目の質問に対する答えなんですけども、創造システム工学科になってから、ちょうど今で5年間、5年生までが全部系の選択を行っておりますけれども、1年目の学生のみが3名のみ第2希望の系に回っております。それ以降4年間は、全員が希望通りの系に進学、系選択を行っております。

あと2つ目のご質問ですけども、上限、下限に関しましては、上限を今時点では設けておりまして、48名の上限で運営しております。

答えがもしも足りてなかったら、追加でご指摘いただければと思います。

田口委員：ありがとうございます。同じページ4ページに学年別本科2年生から5年生までの数字がありますけども、これを見ますと、ちょうど今3年生の物質・生物系が22人という数字で、それからその時土木・建築が50人という、ばらつきがあるんですが。こういったのも希望を優先して、このような数字になっているということでしょうか。

榑副校長：はい。ご指摘の通りで、48をmaxにしますけれども、どうしても滞留というか、留年してしまう学生がいたりとか、退学してしまう学生がいますので、理想を言うとmax 48の、ミニマムでいうと48の逆になりますから32ぐらいなんですけれども、進路変更であるとか、留年等を含めまして、若干ちょっと多めになったり、少なめになったりというのが、ご指摘いただいた通りであります。

田口委員：ありがとうございます。非常に寛容的に言いますか、緩やかに生徒の希望を叶えていращやるといふ、そういう方針は是非続けていただきたいと思います。

最後にもう1点だけ。今のページの最後の最終ページ、24ページですか、進路選択の所ありますが、進路状況、いわゆる就職と進学、進路の割合ですね。だいたい81人と68人ということで、就職が少し多いという状況です。これはこの5年間ぐらいで、こういう傾向は同じなものでしょうか。

榑副校長：これは先ほど専攻科の丸山の方からお話があったように、コロナの影響で進学がちょっと増えているというのがあります。

保護者とも直接話しする機会があるんですけども、会社の方の景気も上がらないし、コロナ

禍なので進学している学生が、若干多くなっているというのが現実です。

大石議長：どうぞ。

成沢委員：すいません、1点だけ。コロナのこの2年間だったんですけど。今日の質問あるいは答弁の中でも、このコロナに関するという言葉がよく出て来てますよね。コロナの影響で、まずはこちらの最初の総務の方からご説明いただいた収入と決算の関係ですけれども。これで例えば授業料のいわゆる未収だとか、あるいはコロナの関係でどうしても途中で退学せざるを得なくなったとか、そういったような状況というのは、あるのかどうか、お聞きしたいです。

合わせて、コロナ禍ということで、就職よりは進学の方が多くなったという話を先ほど来してはいますが、コロナだからそうなったのかというお答えだったんですけども、これからの傾向としては、こういうふうになっていくんじゃないかなとちょっと個人的には思うんですけども、その辺の学校の見解は、いかが考えてらっしゃいますか？

安東副校長：最初の方の、去年入ってきた学生さんは、コロナだから退学したとか、授業料を収めることができなかったと言う学生さんは、基本的に去年の段階ではおりませんでした。そういう話は私の方では聞いてはおりません。

もちろん、毎年家庭の事情とかいろいろなことで退学したりという学生さんはおります。コロナだからという理由でということでは、いなかったと思います。それがまず一つですね。

それから実は秋田高専は、就職・進学の件に関しましては、ずっと前から実は進学者を増やしたかったというのが正直な所でありました。

さまざまなことをやっていて、高専によっては就職する学生さんが10人も1クラスの中に入らないような高専も、中にはあるんです。ところが秋田高専は6割から7割が就職するという状態で推移をしておりました。

去年実は、進学者が少なかった、今年は逆なんですよ。なので、ちょっとどうなるか分からないんですけども。希望としては、もう少し進学者を増やしたいというのがずっと希望で、その対策も、大学の受験をするための勉強会だとか、そういうのをやってきたというのが実際のところですよ。

榊副校長：ちょっと補足すると、そう言いながら、やはり高専の目的である、おそらくあとで丸山先生の方からお話しあると思うんですけども、地域、やっぱりしっかり学生を出したいという思いもありまして、今成沢先生おっしゃったように県内希望をする学生の数っていうのは増えてきてますし、おそらく定着するんじゃないかと。

アフターコロナだからといって、また昔の数までは戻らないんじゃないかなというのは、学内で議論しているという訳ではないんですけども、たまたま今教務主事やってますけど、7年ぐらいつと担任してまして、学生と保護者とずっといつも話をしていたんですけども。希望としてはいいところは入れるんだったら、「秋田ですと働けるんだったら、住めるんだったら、秋田で働きたいんだよね」とっていう親とか、学生の方がちょっとやっぱり多くなってるし、固定化してきているんじゃないかなというふうに、私の私見ですけど、感じております。以上です。

成沢委員：ありがとうございました。グローバル化を是非進めていただきながら、今のよう

進学率も上げていただければと思います。ありがとうございます。

大石議長：すいません、20分オーバーしちゃいましたので、休憩時間をカットして、すぐに後半の方に入らせていただきます。

続きまして、V．学生指導に関する事項を木澤学生主事、お願いいたします。

V．学生指導に関する事項（資料4－5で説明）

木澤校長補佐：学生主事の木澤です。これから学生指導に関する事項について、説明させていただきます。

学生指導の体制なんですけども、スタッフとしては、私含めて学生主事、副主事、主事補、教員の方は4名で、事務職員が4名おりまして、8人体制でやっております。

学生の厚生補導が主に任でして、学生委員会、奨学金とか、授業料免除とか、賞罰ですね、あと通学指導とか、そういった委員会。あとはクラブ指導教員の会議。あとは昨今いじめ対応委員会、これは、委員長は校長先生なんですけども、そういった委員会とか。あとは学生相談室。これは校長の直下の組織になりますけども、副校長の安東が室長をしています。あとは学生会指導ということで、中学、高校で言う生徒会の指導、そういったことをしております。

就学支援等というということで、先ほど授業料免除とか、入学料免除とか、あとは奨学金、育英会の奨学金、あとは民間の団体の奨学金、秋田県の奨学金とかの案内とか、条件満たしているかとか、そういったことをやっております。あとは高等学校、高校生もそうですけども、就学支援金、そういう対応をしております。

次は、事故防止への取り組みということで、学校ですので、いろいろな事故とかあるんですけども、授業中、これは体育の時間ですね、あとクラブ活動、登下校。最近は登下校で、自転車の事故が多いということで。近隣からは自転車の乗り方のマナーが悪いとか、いろいろ近隣の所から、地域からちょっとお叱りをいただいているということでもありますけども。そういうことでそれに対して我々どうしているかという、特に自転車の事故が多いということで。

まず大半、学校には学生さん自転車で通学して来ますけども、29年度からは最近やっぱり全国的にもそうですけど、自転車で人をケガさせたり、死亡させたりといろいろ損害賠償、結構な額を請求されているということで、29年度からは学生には個人賠償責任保険に加入を義務付けております。そうしないと通学駄目ですよ。

入った学生に対しては、こういうステッカーを渡して許可していると。秋田県も令和4年4月から自転車に対して義務付けるということになってるかと思います。

それから自転車のことに対して、いろいろ苦情も多いので、通学指導を前期・後期5回ずつ年10回やっております。学校の正門前とか、門の近くでやってるんですけども、これがその風景ですけども、こんな感じで自転車の並進走行とか、傘差しとか、ヘッドホン付けたりとか、そういったのを朝、ここ、教員が手分けしていろいろ正門前に立って指導をしております。時々臨港警察署の署員の協力も得て、一緒にこういった通学指導を協力しながらやっております。

いろいろ事故とか、犯罪に学生さんが合わないよということで、通学指導ばかりではなくて、臨港警察署、秋田警察署の協力を得ながら、情報モラルとか、サイバーセキュリティとか、そういった講演会を企画したり、あと昨日、秋田臨港警察署の署員の方に薬物乱用防止教育ということで、ご講演をいただきました。

実は今年ある高専で、ニュース等でご存じの方もおられると思いますけども、高専でも大麻

で学生さんが逮捕されたというような事件が起きておりまして、高専生に危険が迫っているということで、昨日講演会を実施しました。

あと学生相談室。これは、組織的には学生スタッフとちょっと独立しているんですけども、室長は先ほど言ったように副校長の安東が担当しておりますけれども、学生さんには4月にこういった学生相談室のリーフレットを配りまして、スタッフとしてはカウンセラーとして、精神科医の先生とか、臨床心理士、ここは外部ですね。内部的には教員、看護師さん、学生課長とか、6名のスタッフ、相談員がおります。

今年は後期からソーシャルワーカーということで、更に2名加わっております。従来はスクールカウンセラー2名体制でしたけども、今年の10月からスクールソーシャルワーカーということで、予算がついたということで、更にソーシャルワーカーを入れまして。これ、相談室のカレンダーなんですけども、これ、ホームページにあがっていて、いつでも学生がいつあるか分かるように、どういう先生が対応しますよということで、一応カレンダーに載ってまして。学生さんはこれを見ながら、相談室を事前に予約して、突然行っても対応できるんですけども、基本的に予約していくということで、ほぼ毎日後期から毎日相談体制をとれるという状況になっております。

相談室の相談内容的には、勉強面とか進路面、経済面とか対人関係、精神面、健康面とか、いろいろな問題で相談室を利用しているということが分かると思います。

その他が多いのは、相談室から聞いたんですけども、この数はここは純粹に在校生の数なんですけども、ここには保護者とか、教職員とか、あとは卒業生とか、そういった数も含まれてまして、ここはちょっと在校生以外の数も含まれているということで、ちょっとここが顕著に数的には多くなっています。

あとはいじめに対する秋田高専の対策なんですけども、これ、国ですね、それから機構の方から、そのいじめ防止対策ポリシーとか、いじめ防止対策ガイドラインに基づいて、各高専いじめに対する防止対策を考えなさいということで。本校でも今年から令和3年度からいじめ防止等基本計画とか、いじめ防止対策プログラムとか、いじめ早期発見・事案対処マニュアルということ策定しまして、これもホームページ上にもあげております。

それで、いじめ防止基本計画ということで、機構からの指示もあるんですけども、そういったいじめ防止対策の委員会は年6回開きなさいと。あるいはいじめに関するアンケートは年4回やりなさいとか。研修回答も実施して啓発活動をするように、そのいじめがないようにということで、いろいろ各高専、考えなさいということで、秋田高専としてもアンケートをとって、その都度それを公開して、いじめ防止アンケートだったら、それを集計して、その後委員会に諮って状況をいろいろ検討するという。あとは学生にいじめをしてはいけないということを啓蒙、啓発する意味でもいろいろ講演会を実施しております。

今年も先ほど言ったように、いろいろインターネット上のいじめとかもありますので、そういった情報モラルとか、情報リテラシーとか、あとは人の命の大切さということで性教育とか、そういった産婦人科の先生にお越しいただいて、そういった講演会をしたり、今年は秋田大学教育学部の先生の鈴木翔先生に来ていただいて、いじめに関する講演会をしていただきました。

先ほどは1年間の計画、秋田高専のいじめに対する対応と計画でしたけども、あとはいじめ早期発見マニュアルということで、そういうのを策定していじめについての理解、先生方が共通認識、これはいじめとか、いじめじゃないとか、そういうふうなバラバラな意見にならないように、共通認識を持てるように、そういったいじめの理解とか、いじめの早期発見、インター

ネットによるいじめの対応とか、組織的対応とか、重大事態が発生した場合にどんなふうに対応するんだといったようなマニュアルを作成しております。

この委員会の組織としては、トップは校長先生になっています。あとは副校長が入ったり、校長補佐が入っております。

先ほどいじめに関しては、アンケート年4回やるということで、内容的にはこんな感じでやっています。形式としては、最近学生さん、全員がネット環境が使える状況にありますので、webを使ったアンケートを実施しております。

以前は紙でやっていたんですけども、今はwebでいじめアンケート、いじめられているかどうかということを各人に問うようなことをしております。あと講演会が終わった後は、こういった内容のアンケートをとって、集計しているということでございます。

次、学生表彰ということで、やはり学生さん5年間長いので、いろいろ学業面とか、課外活動面でモチベーションを上げるために、秋田高専としてもいろいろ学内でいろいろな賞を設けておりまして、一番いいのが秋田高専賞ということで、1年生から4年生まで成績がトップであれば2名なんですけども、5年次に授業料免除になるというようなものです。

あとは学年優秀賞とか、これはクラスで一番であれば、あとは功績賞ですとか、クラブでいい成績とったとか、大会でいい成績とったとか、与えられるような賞。あとは奨励賞、あとは皆勤賞。なかなか皆勤賞は難しいんですけども、5年間無欠席だということで、そういった学生に与えられるというような賞がいろいろあります。

これは学生の処分ということで、年度ごとに書いてますけども、今年は今のところ学生の1件だけ、無許可アルバイトということで、基本許可なしに高専の場合、アルバイトいけませんよということで、今回はこれ1件だけでした。ある意味、学生さん、品行方正になったのかなという感じで。最近飲酒とか無くなって、いい傾向であるんですけども、今年は今のところ1件だけだということです。

クラブ活動に関しては、普通の高校と同じように高専は、普通の高校と高校総体とか、一緒に参加しています。あと野球も高野連に、3年生までは高野連に加入しておりまして、普通に甲子園の予選大会や県大会に出ております。普通の高校と同じくらいクラブは持っております。

あとはコンテスト系ですね、文化部もありますけど。ロボットコンテストがあって、最近はプログラミングコンテスト、これも結構歴史は長いです。最近比較的新しいのはデザインコンペティションとか、英語スピーチコンテストというのがあります。

それで高専における課外活動の在り方ということで、高専教員、大学と違って教育もそうだし、研究もやる。あとは学級担任もやらなければいけない。クラブ活動も面倒をみないといけないですよということで。最近は今いろいろ中学校、高校のクラブ顧問ということで、いろんな話題があって、負担低減という話がありますけども、高専も機構の方から、高専教職員の過度な教務負担や勤務時間を解消するために、ちょっと考えてくださいよ、検討してくださいって言う話があって、秋田高専の方でも少しちょっと見直しをかけているところでございます。

それで、今年からは少し先生方に、平日クラブ活動が平日であれば2時半から、授業が終わるのがだいたい2時半ですので、そこから2時半から5時までとか。あとは基本5時まで、勤務は5時までで、それ以降は延長願を出してもらって、延長するのであれば6時半まで認めますよ。ただし、1クラブ1ヶ月当たり5回、5日を上限というのが、延長できるのは月5回までということですね。あと休日もやる場合は月4回まで認めますよ、ということにして、ある程度制限をかけているということです。

それでさらに今年から、後期からなんですけども、課外活動指導員というのを配置しまして、そういう予算も少しついたということで、要するに外部の人なんですけども、クラブ活動を面倒見てもらう。ただし、今年は外部の人とは言っても、一応本校のOBの職員にお願いして、もともと居た時はラグビーを担当した先生なので、いろいろそういうクラブ活動、面倒をいろいろみてもらえるということで、今年は試験的にハンドボール部のところに付いてもらって、もしハンドボール以外から延長5時以降もやりたいよと言った時にも面倒を見てもらえるようにしました。それから、休日にも面倒を見てもらえるように。そういったことをしてもらえる正職員じゃなくて、外部指導員を設けて、先生の負担を低減しようということを今年から取り入れています。

来年度は2名体制、令和4年は2名体制になるんじゃないか、今1名課外活動指導員を考えてますけども、2人雇用できるんじゃないかというふうに、事務方と今協議しております。

体育大会、これは令和2年度ですけども、去年は先ほどあったようにコロナの影響で、まったく大会が開催できなかったんです。ただし、ラグビーだけは、ラグビーは基本秋ですね、10月なので、これだけはできたんですね。それでラグビー部だけは東北大会で勝ったので、全国大会までいけたということになります。

他の部は何もできませんでした。

令和3年度の、最初はコロナで夏ぐらいまでは全然ダメだったんですけど、機構の方からできるだけ学生には実現させようと、大会を実施するようというふうなお達しがありまして、本来全国大会の前に4月ぐらいに高専体育大会というのがあるんですけども、今年はコロナが夏までは結構猛威を振るったので、普通夏やるような大会を結構1ヶ月ぐらい遅れて、全国大会もちょうど今頃やってたりするんですね。水泳なんかも先週、実は真冬に全国大会をやったり、ちょっとずれて今年は開催しております。

今年はそれで秋田高専としては、ハンドボールが全国大会に、それこそ12月22、23、ちょうど終わったんですね。残念ながら負けてしまいましたが、あと柔道部、今回団体3位ということで、個人戦も結構2位、1位と階級別で好成績をあげている。水泳も先週種目は完走しましたが、4名ほど出場しています。

時期的にこういう時期にやっていますよということで、今年だけ異例です。

あとコンテスト系です。これ、去年の結果ですけども、去年はちょっとロボコンもありましたけども、普段であれば集まってやるんですけども、去年オンラインでした、全国大会もオンライン、国技館じゃなくてオンライン。あとデザコンも去年はこれもオンラインでやったと思います。去年は優秀賞だったですね。

今年はロボコンの方は、東北大会はオンラインでしたけども、全国大会は国技館の方でやりました。東北大会では秋田高専が優勝しまして、国技館に行っております。残念ながら国技館ではうまく動作しなくて、ちょっと動かなかったりとかしましたが、でも一応全国大会に出場しました。

あとプレゼンも、これはこれからですけども全国大会に行く予定があります。英語のプレゼンです。あとプロコンも、今年は敢闘賞でしたけども賞をいただいたということです。

最後になりますけども、これ、学生会のイベントなんですけども、高専祭・スポーツ大会。今年は残念ながらスポーツ大会中止でした。ちょうど夏休み明けにスポーツ大会やるんですけども、その直前に学生の中でコロナが出たということで、ちょっと危険だねということで、スポーツ大会は中止させました。

秋口になるとたいぶコロナが収まってきましたので、スポーツ大会は9月の後半なんすけども、高専祭10月の下旬でしたので、その頃になるとたいぶコロナの影響が少なくなりまして、普通通りやりましょうと。ただし、外部の人は入れないでということで、外部だと不特定多数なので、そこら辺がちょっと我々は管理できないということで、学内の学生だけで盛り上がりましょうということで。

あとその時の様子の写真なんすけども、今年は食事の提供に関しては、自分たちで普通は模擬店なんすけども、今年は学内にキッチンカーを入れてやりました。それからスポーツ大会は中止になったので、本来コンピュータゲームのスポーツですね、e-sports大会を高専祭の時にやりましたという写真です。あと花火ですね、学生会の方でどうしてもやろうと。7年ぶりの復活ということで、意外と地域の住民からは、「なんで高専やらないの？」ということで、花火、いろいろリクエストがあったので、お金もかかりますけども、今年は是非やりたいと、学生の方から是非やりたいということで花火を、久しぶりに7年ぶりに花火を打ち上げた。15分～20分のものですけどもやりました。ということでございます。以上で、学生関係の事業に関してご説明いたしました。どうもありがとうございました。

大石議長：次、VI. 寮の運営に関する事項、小林校長補佐・寮務主事より、ご説明をお願いします。

VI. 寮の運営に関する事項（資料4－6で説明）

小林校長補佐：寮務主事の小林でございます。それでは、寮の運営に関する事項について、1. 寮の運営方針からご説明させていただきます。

寮の運営方針といたしましては、学生寮は、学生の修学及び規律ある共同生活の場としての教育並びに厚生施設の設けとすること、修学・教育・厚生。

修学といたしましては、寮生である前に学生である。規則正しい生活に基づく学業成就こそが本務であると。

教育に関しましては、集団生活を通じての人間形成を図るための教育の場として、寮があると。

厚生といたしましては、安全管理と食事の提供。行事を通じて相互の親睦を深めるということで、寮を運営しております。

寮の運営体制といたしましては、寮務スタッフ、寮務主事・副寮務主事・寮務主事補が1名、それから寮務係が3名、計6名です。それから寮務委員会はこの寮務スタッフ3名に加えて、各系からの寮務委員4名で合わせて7名があたります。それから寮生会は寮生の自治と協和により人間形成を助長し、寮生活の充実、向上をはかる。ということで、13名の役員を中心に活動しております。

それで、寮務の主な活動といたしましては、開寮・閉寮、避難訓練、面談月間、寮生保護者会、居室点検、共同学習会、それから寮見学説明会とがございます。

例年と違しまして、昨年度・今年度は新型コロナウイルス感染症対策として、手洗いやマスク着用、換気、それから朝晩の検温の実施、それから点呼方法を従来の全員がロビーに集まる形式から、ブロック長、副ブロック長による報告型の点呼。それから、休養室を男女別に設置して、具合の悪い寮生はその休養室で経過観察。それから食堂の椅子を奥側に配置しまして、このように配置いたしました。感染を防止する。それから2人部屋であった部屋を全員1人部屋に部屋替えを行うと。それから状況に応じて行事を中止するというようなことで対応いたしました。

それによりまして、令和2年度4月11日に開寮いたしまして、その後は秋田市内の高校生のコロナ感染の影響によって、4月13日に閉寮となりまして、それから5月10日に再開寮いたしましたけれども、それ以降いろんな対応をいたしまして、クラスターも発生せず、ずっと開寮しております。

寮費とセキュリティに関しましては、ここにありますようなお金がかかりますけども、現在全員個室で1人部屋となっております。また青雲寮のセキュリティといたしましては、昼間は寮務事務員3名、それから夜間は宿直教員ということで対応しております。24時間の安全対策となっております。それから女子寮はカードキーを使用して、カードキーが無ければ女子寮に入ることもできませんし、それから出ることもできません。

入寮状況といたしましては、平成31年が111人だったのが、令和2年が97名、それから令和3年が92名ということで、4月1日現在の数字ですけども、減少傾向でございます。

それから寮生の1日といたしましては、まず点呼・朝食・昼食・夕食・学習・入浴・点呼・消灯ということで、日に2回、朝・夕の2回点呼いたしまして、現在点呼システムはタブレットを使用した、点呼システムとなっております、これによって健康管理を行っております。

主な行事といたしましては、4月新入生歓迎会。マスク着用で行いまして、7月の寮祭も寮生のみで行いました。10月のなべっこはコロナのため、昨年度も今年度も中止となっております。

それから予餞会も通常1月なんですけども、1月ですと帰省した15名ほど県外寮生がおりますので、帰省してから戻ってきた際にクラスターの懸念されますので、昨年度も今年度も12月末で実施をしております。

以上となります。

大石議長：ありがとうございます。続きまして、Ⅶ. 研究・社会連携に関する事項に関しまして、副校長（研究担当）、地域共同テクノセンター長の宮脇先生がご欠席なので、地域共同テクノセンター副センター長の丸山先生、よろしくお願いいたします。

Ⅶ. 研究・社会連携に関する事項（資料4－7で説明）

丸山地域共同テクノセンター副センター長：それでは研究担当の宮脇に代わりまして、丸山より研究・社会連携に関する事項について説明させていただきます。

地域共同テクノセンターが中心になりまして、地域の産業界との連携を行なっているところであります。先ほど専攻科の方でも説明いたしましたけれども、産学協力会との連携、それから新たにグローバル人材育成会を立ち上げました。

また平成27年度から令和元年度にかけまして、秋田大学のCOC＋事業に参加校として加わりまして、秋田大学、秋田県立大学、秋田高専、それからふるさと定住機構、（これはAターン採用やAターン就職の支援を行なっている機関ですが、）それから秋田高専産学協力会もメンバーに加わった事業であり、地域連携と若者の地域への定住を、長岡技科大さんや、産業技術センターとの連携というものによって行い、事業期間終了後も、COC＋協議会等を継続していくといった状況になっております。本事業の主な活動内容ですが、学内の学生へのキャリア支援とか、社会に出てから役立つ講演会といったようなものを、例えば産学協力会の会員企業様から講師をお招きして、講習会や講演会などといったものを継続的に行っています。

それから学内の取組といたしましては、先ほどありましたけれども、基礎的な研究を進めるということで、科研費の獲得をめざし、校長先生、宮脇研究担当が申請書の作成の指導を行う

といったようなことも行いました。実は東北・北海道地区のテクノセンター関係の会議がありますが、どうも秋田高専は科研費の採択率が他の高専に比べると高くなっているといったような状況になっております。また、第1ブロック研究推進ボード会議からの情報ですと、秋田高専は全国の高専の中でも結構採択率が高い方だということでもあります。半面ではありますが、社会実装研究は秋田高専は弱いという結果もありますので、そこをどうにかしたいといけないといったようなことが言われております。

それから、学生へのキャリア支援だけではなく、県内企業様との連携という意味では、県内企業様の工場見学を、また企業の方と連携して行っていたり、ここに書いてあるように知的財産権セミナーというようなことも行って、企業間や秋田高専との連携も深めるという努力は継続しております。ただ最近では、コロナ禍で、そういうことが実施できていないことが残念ではあります。

数年前までは、インターンシップ体験談という、実際に就職した卒業生とその企業様のインターンシップ担当者をお招きして、インターンシップの実施例とそれはなぜ就職に接続したのかという事例紹介を他の県内企業様に聞いていただくという研修会を開催しておりました。これ、非常に好評でして、コンサルタント会社が開催する研修会は、割と一般的な開催例ですべての企業が活用できるとは限らないのですが、実際にこじんまりはしてるんですけども、学生を採用してくださる企業様からそういうお話をいただくというのが非常に役に立つというようなこともございます。

それから、秋田高専の産学協力会ということで、もうかなりこれ歴史が古くて、現在県内企業が90社ございます。そして本日いらっしゃいます菅原雅史様が会長を務められております。

先ほどから再三お話している専攻科改組と絡めまして、秋田高専グローバル人材育成会というものを立ち上げたということになります。令和3年の10月現在で会員企業様が93社です。こちらの会長は、元IHI回転機械の社長であり、昨年までIHI顧問の榊純一様であります。同会長は、秋田県と秋田大学やアスター様が連携する電動化システムの研究プロジェクトでもご活躍されている方でございます。

秋田高専グローバル人材育成会の趣旨のポンチ絵を示します。先ほど先般植松校長から高専の教育力を上げること、それから社会実装研究をもっと充実させたいということ、県内企業様との連携をもっと拡大しなければいけないということ、これらの指示がございまして、これを実現するため、植松校長を発起人とする「人材育成会」を立ち上げたことになります。イメージは、ひょうたんが2つ重なっているような感じですけども、秋田高専をちょっと中心に書かせてもらって、県内企業様と県外企業様を秋田高専の教育プログラムで繋げていくというイメージです。そうするとどのようなことが考えられるかというと、今現在ですと、先ほどから問題になっております秋田高専で育成した学生のほとんどが県外に就職してしまっている、だとしても、毎年、毎年例えば50%の学生を秋田県内に就職させられるかというと、そういったニーズも実はないということで、このような県内企業様と県外企業様と連携を作っておけば、人材交流が将来的にわたって、長い間維持できるのではないかと、考えたわけでございます。

それから我々は県内企業様とは研究のつながりは持てている訳ですけども、県外企業様とも連携したいと考えました。県内企業様がせっかく持っている技術を、人がいない、もしくはお金がないから発展させられないというようなところがあるので、それをどうにかうまく動かしていきたいといったところで、県外企業様と共同して、それを実現できるのではないかと考えました。そして、我々秋田高専のシーズも、その中に取り込めるのではないかとといったような、このよう

な3つの連携を一つの循環システムとしてしまえば、この3者がwin-winの関係を築けるのではないかといったところが、植松校長のこの会を設立するところの趣旨となっております。

実際どんなことを行っているかというところの2年間、実際に秋田に企業様を呼んで、というのが最初の1年できたんですけども、去年からはできなかったりして、非常に困ってしまっておりま

す。

大きく分けますと今やっていることは、だいたい4つのことになります。

まずは企業様と本校と就職担当との面談の機会をちゃんと作るということです。

それから、学生の研究発表会を県外の企業様、県内の企業様に聞いてもらう。すなわちそれは秋田高専のシーズを企業様に直に知っていただく機会を作るということです。

それに合わせまして、当然企業様は、我々の学生を、就職といったところにマッチングさせたいと思われていると思いますので、その学生の研究発表会と一緒に企業様がブースを作ってもらいまして、そこに学生が個別面談を行うといったようなことを1年目は秋田駅前のAUで行いました。昨年度はちょっと対面は難しかったので、秋田高専内でwebでの面談という形態にいたしました。

このような主に4つのことを行うことによりまして、すぐには県内企業様は就職できないケースも考えられます。ところが、一度県外に就職した学生が、例えばある県内企業様とある県外企業様が連携を維持していると、いったところで人材交流の余地というのは残っておりますので、例えば5年後、10年後にその学生がもしかしたら家庭の事情かもしれないし、もしかしたら先ほど石井様もおっしゃったような県内企業を変えてやるんだと、そういったような意気込みで、もしかしたら県内に戻ってくるんじゃないかと、というような仕組みがこのまま維持できればいいんじゃないかなというように、循環ができていけばいいのかなというふうに考えているところでございます。

先ほど申しましたように、秋田高専の求人倍率は20倍です。ただ学科が4学科ありますので、少なく見積もっても3,200社ぐらいの企業様と関係があるんですけども、今は90社様が会員になっているということで、まだまだ増やせる余地はあると思います。

そうすることによって、COC+の事業を行った時に国から言われている、「地域連携を自立してやりなさい」といったところに1個1個近づいていくようにがんばっております。しかしながら、そのスタートアップ資金がどうしても必要だということで、高専機構の競争的資金と言いますか、そういうのを獲得しまして、一応スタートアップとして、例えば1事業あたり100万の研究費を配分して、そこに企業様に連携していただいて、その後は、例えばJSTだとか、NEDOだとか、サポインとか、そういった研究資金獲得へつながる教員へのスタートアップ資金支援というものも、令和2年度と3年度と継続して行っているところです。

それから社会実装が秋田は弱い、秋田というか基本的に東北全体が弱いと言われております。高専ですから、大学とは違う位置づけとして、この弱みをどうにかこれから改善していかなければいけないといったところで、秋田高専の産学連携というものがうまく機能してくれればとよいと考えているところであります。

それから秋田高専産学協力会、非常に歴史があるんですけども、今のお話から、我々はこのように考えております。要は産学協力会とグローバル人材育成会をむしろ一つにしてしまっ

先ほど申しましたように COC + 事業を行うことによって、事業開始前は 50 社程度の会員数だったんですけれども、産学協力会の方も 90 社程度に増えていますし、現在グローバル人材育成会の方もまだ少ないんですけども、90 社程度あるということで、この 2 つが合流すると 200 社ぐらいの協力会になると、いうことを目指して、一つ一つの事業内容をすすめていきたいと考えます。

もう一つは、やはりこれからは外部資金、社会実装のために外部資金をとるためには文科省とか、国が言っている「外部リソース」というのが必要になってきます。簡単に言ってしまうと企業様が自己資金を出さなければならないといったことにもなります。その中で我々のシーズを活用していただくということになるんですけども、その時も県内企業様と県外企業様と我々でタッグを組むということが、3 方にとって、win-win の関係なのではないかと考えるところでございます。

あとは、秋田高専の方で非常に活発に行っている、これ、科研費を用いて、あと NEDO とかも、からもお金をもらってやっている先生の研究事例を紹介いたします。これは秋田県産学技術センターとの共同研究、2 件ともそうだと思うんですけども、というような事例がございます。また、先ほども言いましたけれども、科研費の採択率が高いということで、是非企業の皆様、それを認識していただいた上で、是非ご活用いただければと思う所でございます。

あとの資料におきましてはデータなので見れば分かると思いますので、時間の都合上、以上とさせていただきます。

《意見交換・質疑応答》

大石議長:ありがとうございます。これですべての説明が終わりましたので、後半だけのご質問、ご意見ございますかと聞きたいんですけど、全体に対してで結構でございます。

菅原委員:菅原と言います。前半の方に説明に何度か出てきている、地域貢献ということが高専の大きなミッションというか、存在意義であるというふうに理解してますけども。これは私の意見として質問ではないんですけども。

これを現実のものにしていくのに、聞いていて、学生さんがどれだけこのことを理解しているだろうかというのをふと思いました。

学生さんがこの地域貢献ということを自らのテーマ、あるいは自分が関わっていくというこの理解が深まれば、何かその後のかなり大きなことが変わっていくのではないかとちょっと思いまして。

参考になるのが、今の企業経営の世界ではパーパス経営というのが非常に言われておりまして、この場合のパーパスというのは、社会的存在意義とよく日本語では言われるんですけど、なんのために自社はこの社会で存在しているのか。これをお題目だけではなくて、一人一人の社員が、そのパーパスにいかに関わっているかということを会社の上司と社員、あるいは社員同士、ずっと議論を進めて、一人一人全部同じカラーではなくて、その明確にしたパーパスと自分の関係性を深く理解して、そういう風土を作っていくと。

これはアメリカで 10 年ほど前から実行されていて、多くのデータが出てまして、これをしっかり実行した会社が非常に高い成長をしているという成果が出ている。

それを地域貢献という話を聞いた時に思い出しまして、それと同様の取り組みをこの社会貢献ということについて、学生さんがより深く理解して、地域貢献ということについては、それ

イコールこれであるという答えはたぶんないと思いますので、いろいろな答えが、場合によっては一人ひとり自分にとっての地域貢献というものがあるのではないかなと思います。

それを一人ひとりがもつためには、長期にわたって考えを作って、あるいは議論する場を作って、高専であれば、1年生に入った時から、ここを卒業するまで、何度となくそういう場を作っていくことで、卒業する時には自分として一人一人の地域貢献というのがしっかり自分の中に頭の中にインプットされているというような形が何らかの形でできないものかなということをすると思いましたので、ちょっと参考にさせていただければと思います。以上でございます。

大石議長：他、ございますか。コメントに対してご回答、誰かいただけますか。

丸山地域共同テクノセンター副センター長：菅原様、どうもありがとうございます。

ちょっと先ほども私、余計なことばかり言って言い忘れちゃったんですけども。COC の時から今実際終わって、その後やっていることがございまして、菅原様にも石井様にもご協力いただいていることなんですけども。COC の地域学コース4科目8単位。それから内容としては地域産業の特徴とか、地域史とか、地域計画といった話を経営者、企業責任者、県庁の政策監、それから産業技術センターの研究員になっていただいて、その効果は間違いなく出ております。

それらは要は教育全般に言えることだと思いますけれども、課題発見、それをどう解決していくかというところのヒントを成功事例でもいいですし、社長様のお考えでもいいですけども、言っていただくことが非常に有効に機能しております。

ちょっと前ですと、例えば就職の時に面接の練習とかするんですけども、全然社会のことが分かっていない学生が多かったんですけども、最近は、非常に学生がそういった所に自信を持っている。それはなんのおかげかというと、そういった社会の知を注いでいただいている結果だというふうに考えております。

最近、ほとんどの学生が受講しているような、100 何人の学生が受講しているような状況が続いておりますので、それを少なくともそこだけは維持していきたいと。

あとは講義もそうなんですけども、実際にチームとして研究を行っている所に、そこに学生が入るというところが、それが一番のことかなと考えておりますので、その辺りも県内企業様、県外企業様含めて進めていけたらいいなと思っています。

どうもありがとうございます。

大石議長：他、ございますか。

山村委員：時間がないので、手短に。いじめのところがあったんですけども、この学生相談室の所で見ると対人とか精神面の所の比重が多いような気がします。これが同年代の高校生と比べるとどうなのかっていうのが一つ疑問と、もし多いのであれば何か原因があるのかとか。

それから、こういった学生のメンタルヘルスに関して高専さんとして、PDCAを回して、もし何か問題があるならば、改善策を講じてもらえてるのかどうか。ないしは保護者との連携、それから教職員の方がその他のところで相談されているようなところもありましたので、学生さんの問題だけではなくて、アカハラ、パワハラ、セクハラと言った部分がどれぐらい理解されているのか、そういった、教職員のFD、ファカルティデベロップメントみたいなものが行われているのかどうか、ということをちょっと教えてください。

安東副校長：これは秋田高専のみならず、全国の高専に言えることなんですけれども、相談室の関係で来る学生さんは比較的多いです、高校に比べると。

その多くは成績がやっぱり進級に関わるところが非常に厳しいので、それに関わる相談というところかなり多いということが、秋田高専だけじゃなくて他の高専でも言えているということです。

最近では、これ延べの人数じゃないかなと思うんですけれども、相談に来る学生はいつも決まっている学生で、その学生が何回も来られるという形の場合が非常に多くて、同時にそのお父さん、お母さん、それから場合によっては同じ案件で学校の中に相手がいる場合もありますので、その方の相談と、1つの件で2人の学生がしかも家庭も含めて相談に来られるということもあって、人数的にこうなるんですが。

最近では、ケースは少ないですけれども、ちょっと重いことが多くて、そういうところで難儀しているということがあります。

それから先ほどの教員等の相談が結構あるんじゃないかという話がありましたけれども、秋田高専では教職員相談室という所がありまして、それに隔週カウンセラーの方が来られてまして、相談体制を敷いております。

従来はこの学生相談室の中に一緒に教職員の相談もやっていただいたんですけれども、やはり別にした方がいいということもあって、今は別にしております。

そちらの方の利用の状況ですけれども、そちらもある程度決まった方が行っておられるようなんですけれども、1人とか2人とか。一応利用できる時はいつでも利用できるような体制はとっているという、そういう状況です。

山村委員：ソーシャルワーカーの方も2名雇用されたということですけど、これって、どういう方、高専さんが個別に雇用されたのか、何かそれともそういうのも文科省とか、県の補助があって、そういうのがなされたかというのはわかりますか？

安東副校長：高専機構の方から予算がきまして、それで体制を敷いたということです。聞くとところによれば、その内の一人の方は秋田県の高校の方のソーシャルワーカーもやっておられて、全県を2人で回っているという話でしたけれど。秋田高専は見ておわかりいただいた、先ほどの例にもあったように月火水木金、後期はほぼ毎日専門職の方がおられるので、非常に充実した状況になっていると思います。

それからパワハラ等、いじめ、先ほど質問ありましたけれども、パワハラ等のFDに関しては、年1回講演会をやったり、それからビデオで講習会を開いたりというような形で、FDを展開しているというのが実際のところです。

山村委員：どうもありがとうございました。いろいろ対策とっていただいて、安心しました。ありがとうございます。

成沢委員：是非今日までこれを聞きたいと思って来たものが1つありまして。昨年の7月ですかね、住宅建築耐震改修促進協議会さんと市の方と一緒にたぶんやられた事業だと思うんですけれども、耐震診断のいわゆる地域の皆さんに協力いただいてということでやられたというのが実は伺ってまして。学生さんが十数名だというふうに伺ったんですけれども、この内容を少し教

えていただきたかったなということと。

それから先ほどいわゆる産学のお話ありがとうございましたね。ここにこのことは一つの一例として考えられるんですけども、産学官の協力というのは、学校としてはどんなふうに考えていらっしゃるのかということに合わせて一つ教えていただきたいと思います。

植松校長：耐震診断の件ですけども、寺本准教授は学生を使って、また地域の方も交えてやられたことで、地域の方が非常に感謝をされていて、他の地域にも拡大してもらえないかという要望はございました。

ただ、今年はちょっと手が回ってないようでして、私自身は建築とか、土木だけではなくて、他の系の先生方にもできるだけ地域を交えた形で、いろんな活動をやってくださいとお願いしております。他の系でも、どちらかということ子ども相手が多いのですけども、いろいろやっています。高専のミッションとして、そういった形の地域貢献が必要だと思っていますので。もし、耐震診断の件でお聞きになりたいということであれば後でご説明に行きまして貰います。その時要望を言っていただければ、本人もまたやる気になるかなと思います。是非私としても進めたいとは思っております。私の専門も建築構造分野です。

成沢委員：今日は産学協力会の説明いただいて、企業さんと学校とやってらっしゃるということ、非常に素晴らしいことだなと思うんですけども。やっぱりここに官も入れていただくことによって、いわゆる市とか県、入れていただくことによって、さらにこの内容が充実したり、広がっていくんじゃないかなと個人的な見解なんですけど、そういう官がここに入らないのか、それとも入れてみたけどもなかなか入れないのか、その辺の学校の考え方を教えていただきたいと思います。

丸山地域共同テクノセンター副センター長：ずっと産学と言っていたんですけども、当然官も入っております。実際そういう動きもして。例えば去年ですと地域共創の場形成なんていうのにチャレンジして、県の産業労働部さんに何回か伺ったり、実際に再エネの推進課の方とお話ししたり、そういうこともしております。あと秋田市に伺ったこともありますし、そういうことは積極的にやっております。

地域全体で連携してそこに官が入るというのが理想の形なのかなということで、そういうことも常に意識しながらやっているところでございます。

成沢委員：ありがとうございました。耐震のこの内容については役所の方からも少しは話を伺っていたので、細かいことは大丈夫なんですけども。是非継続をして、耐震化だけでなく、他のテーマでも地域の皆さんに協力をしていただきながら、学生さんのいわゆる、学力の向上だとか、あるいはまた学生さんの研究のプラスになるような、そういったことを是非進めていただきたいなという思いでお話をさせていただきました。よろしくお願いいたします。

大石議長：他にございますか。

石井委員：高校とか、中学校とか、デジタル化推進構想が文科省から発表されているんですけども、秋田高専の方は ICT とか、D X の設備の投資とか、そちらの方の配備とか、そういう方

針とかあるものでしょうか。

榊副校長：そんなに大きな方針というほどではないんですけども、e-ポートフォリオというICTを用いたペーパーレスのことをしたりとか、あるいは学内の遠隔配信を行ったりとか、あとは資料保管等、先生方の解答用紙とかを全部ペーパーレスということを現在進めようとしております。

その時にどうしても学内で学生が自由にスマホでもタブレットでも、ノートパソコンでもwi-fiにつながらないといけないのでという話を正に今日朝、校長とちょっとしてまして、機構本部であるとか、文科省であるとか、県とか市とかを含めまして、何か申請する機会がないのかねえ、という話を。あと根本的に解決しないといけないので、学内でももう少し真剣に議論してこうということをちょっと議論し始めております。

ただすいません、具体的な何か解決策というか、ソリューションというのは、今の時点ではお話しできるものはないです。

石井委員：わかりました。

大石議長：他にございますか。

田口委員：恐れ入ります。1つ質問をさせていただきます。科研費と外部資金の獲得、非常に重要なことであると思っています。

それで一つ18ページ、申請率とありますけども、これは何を分母としたものかわかりませんので、その点1点と。

それから次のページの19ページ、新規採択率23.8%、この数字をどう見たらいいのか。100%の内の13%という、これが高いのか、低いのか、どう評価したらいいのか、ということをお教えいただきたいと思います。

それと20ページ、ここの外部資金獲得の3番目の状況、獲得の内訳見ますと、かなりバランス的に開きがある。年度によって、項目別寄付金、共同研究、受託研究、かなりばらつきがありまして、この辺の事情について伺いたいと思います。

丸山地域共同テクノセンター副センター長：まずは申請率は、科研費の申請する資格の教員が分母になっています。

採択率の方は、この値なんですけれども、だいたい科研費の採択率というのは、多いもので20%～25%、少ない物では10%程度のもものもございます。そのような背景でこのような数字になっているとお考えいただければいいと思います。

外部資金なんですけど、やはりこれは申請は、みんなで積極的にやるんですが、やはり採択というのはそう簡単ではないということで、大きいのが基準に当たれば金額大きく成りますし、それはちょっと年度ごと定常化させるというのはちょっと難しいかなという状況でございます。

田口委員：わかりました。共同研究にバラツキがあるというのが今のお話でわかりました。

寄付金が令和2年度大きくなっているというのは何か理由があるのでしょうか。

丸山地域共同テクノセンター副センター長：グローバルの創設が令和2年度になっております。それが寄付金として、各社から5万円いただいております、最初90社なかったんですけれども、それが加味されているので寄付金が大きくなっていると。

田口委員：令和3年度の状況、概況はいかがでしょう。

丸山地域共同テクノセンター副センター長：申し訳ないです。

田口委員：学生表彰について、1つだけよろしいでしょうか。最高賞もありますが、秋田高専賞ございますけども、これの理由として、学習成果や課外活動等において卓越していると認められたということですが、これは客観的な何か基準というのはあるのでしょうか。それと選考の審議、選考過程と言いますか、についてお伺いしたいのと。

今回令和2年2名ということですが、これは具体的にどんな授賞理由であったかというのを
お伺いしたいと思います。

木澤校長補佐：秋田高専賞、まず定員が2名なんですけども、基本的に成績で決まります。1年生、2年生、3年生、4年生の成績がトップであるということが、基本もう学習成果に特化されています。そこで、各4系がそこからいろいろ推薦されてくるんですけども、結局成績で誰がトップですかということで、そこから2名を選ぶという形になります。ここでは課外活動という基準ではちょっと入ってはきてなくて、もう成績だけで決まっている状況であります。

田口委員：そうすると下の学年優秀賞、これを毎年とっている人がその上になると。

木澤校長補佐：そうですね。高専賞は毎年各学年で、結局1番成績順位を付けた時に低い順位になった時。成績が低いという言い方は、トップって言うか、上から順に並べた時に2名を採択するということになっております。

田口委員：もし今の説明であるならば、少し私は残念だなと思った印象を持ったんですけども、最高賞である秋田高専賞でここにうたわれておるように、課外活動等においても卓越しているという部分がありますので、そういった今の学年優秀賞、的な、成績に限らずですね、もっと幅広く選ぶべきではないかなと思う次第でございますが、そういった点については、過去含めて、そういった選考しようというお考えはないのでしょうか。

木澤校長補佐：秋田高専賞、この賞が設立されてからそんなに古くはないんですけども、今のご意見を伺って、今後学生委員会等でこういう意見が出たということで、検討していきたいと思えます。ありがとうございました。

赤上委員：いろいろ丁寧なご説明いただきまして、ありがとうございました。

2年前も参加させていただいたんですが、その時にはグローバルだとか、いじめについてもこれほど深い説明がなかったんじゃないかなと考えておまして、非常に深まってきているんじゃないかなというふうに思っております。

もう1点だけ、今高専に残されている課題というのは、みなさんご承知の通りだと思うんですが、少子化だと私は思っておりまして、地域に人を残すというのが一番大事ではないかと思っています。

それは地域にお金を落とす、地域のGDPを上げるというのが必要じゃないかなと。学生にその話をしてもなかなか難しいと思うので、じゃあ、具体的にはということで、これ、質問ではなくて意見なんですけれども。この地域のすばらしさを発見していく、それを例えば夏休みとか、長期の休みの課題とかにさせていただいて、それでできればこの地元の愛を深めるって言うんですかね、そういったことを熟成させるようなテーマを、これは先ほどの菅原さんのお話からも近い所があるんですけれども、そういったリベラルアーツみたいなことをやっていただくというのが是非必要なんじゃないかなと思いますので、是非とも検討していただければ幸いですというふうに思います。以上です。

丸山地域共同テクノセンター副センター長：ありがとうございます。今のお話、菅原さんと最初の方の石井さんの話に全部共通すると思うのですが、やはりそこを我々していかないといけないと思っております。

先ほどの地域産業という、例えば授業でそういった各企業様も非常に特色のあるこれまでの技術とか、経営理念とか、そんなものをお話くださっているのもありますし。あと今やはりコロナ禍の後、戻らないんじゃないかという話があるんですが、実際インターンシップ、県内に行く件数が確実に増えておりまして、それはコロナ禍だからなんですけれども、それをそのまま維持できるようにしていくと、今のお話に近づくかなというふうに考えておりますので、その辺りは真面目に戦略を練っていきたいと考えております。

榊副校長：あと教務主事としては、工場見学というのを今4年生で2泊3日で東京の方に行ってるんですけれども、これも教務の中で議論している話ではなくて、私自身が7年間4、5年生の担任をして感じていたことなんですけども。

ちょうど2年前に卒業したクラスというのが3年生、4年生、5年生と2年生の時からなんですけど、県内の企業に別に何も説明せずにホームルームであつたりとか、「今度県内の会社みんなバスで行くからお弁当持って来てね」という話で連れまわしていたんですよ。だいたい年に2社ぐらいを県内を回したんですけれども、そうするとそのクラスだけ当たり前のように県内就職の人数増えているんですね。

だから、ちゃんと授業しろとか、ちゃんと教育するというのは、もちろんこちら側のオブリゲーションかもしれないんですけども、何も言わずに県内もって学生に見てもらおうというのがすごい大事なかなというふうに、これは教務主事というよりは、担任の先生をずっとやっていて思っていることです。

それが何%というのは学校でちゃんとターゲットゴールを設けないといけないと思うんですけども、秋田にある高専なんですから、10%、15%なのか、20%なのかっていう学生が、やっぱり県内に残っていかないとそれこそ自分がここからいなくなった後にも、何のための高専なのかわからなくなるんじゃないかというふうには考えています。

すいません、あんまりちゃんと補足できていないんですけど。

赤上委員：一番最後のが一番大事で、県外にどんどん子ども達を出してしまうと高専が存続で

きなくなってしまうんですね。ですので、そのためにもやはりここの地にかに子どもを残すかということをおっしゃるようなことを、是非とも活発にいただければありがたいなというふうに思いますので、引き続きどうかよろしくお願いいたします。

大石議長：あと、ありますか。

金子委員：学生の事故が多いというのはちょっと気になったんですけども。その対策として学生に自転車の自賠責だとか、そういう対策講じていられるんですけども。やはり本校に訪れた際、よくよく感じるですけども、ちょっとアクセスの道路が非常に狭かったり、凸凹したりして悪かったので、やはり長期的に考えるとやっぱり秋田の高専の魅力を発揮するためにも、やはり例えば横山金足線の方からアクセスする道路とか、そういうのを都市計画に組んでもらえるように、なんか働きかけが必要かなというふうな感じもしました。

直接的には例えば飯田街道辺りですと、通勤時間帯、通学時間帯はやはり警察さんに道路規制をお願いするとか、そういう対策を考えていただければ。私も子どもが通っている手前ですね、非常に特に冬場、雪道ですと非常に危険なんです。それでそういう対策を講じていただければいいなというふうに思いますけども。これは意見ですけども、よろしくお願ひしたいと思います。

木澤校長補佐：ありがとうございます。昨日もちょうど秋田臨港署の方に、薬物乱用防止教育ということで来ていただいたんですけども。その時もちょうどやはり臨港警察署にも高専かどうかは分からないんですけども、やっぱり自転車の乗り方のマナーが悪いとか、そういった苦情が直接本校にもきますし、警察署の方にもいくということで。

警察の方とお会いする時は、できれば学校の周囲をパトカーなので、そこをすることで学生さんの抑止力、マナーに対する抑止力にもなるので、いろいろ回っていただけませんかとか、あとは6ページにもあるように我々も通学指導するんですけども、一緒に臨港警察署の方と一緒にマナーに対する協力を、一緒にやらせていただくその機会とかっていうことを設けていただけませんか、そういったお願いをしながらいろいろそれを自転車に対する事故防止を我々としてもなかなかゼロにすることはできないんですけども。

学生さんは横山金足線から、結構秋田市から自転車で来るので、いろいろまた通学に対する苦情がいろいろと遠い所からも来ている、あれは秋田高専の学生だということで来ているんですけども。そういった意味でも、ちょっと警察の方ともいろいろ協力しながら、今後やっていきたいなとは思っております。

いろいろご指摘ありがとうございました。

9. 議長まとめ

大石議長：45分以上オーバーしてしまったんですけど、1時間ぐらいオーバーしたんですね、すみません。熱心なご発言、コメントいただいてありがとうございます。

自分が今やっとならべれるんですけど、私はとてもよくやられていると思います。特例認定を受けて、スタッフの教員の研究のアクティビティが維持されているということですから、科研費も申請増えていて、採択率も23.8っていうのは、これはとても立派な数字だと私は思います。

あとは、昨今やっぱり定員管理が厳しいので、よく分かります。やはり各学科もてなくて、

1つにしてやっている、行うというのと、やっぱりこれ、技術進歩、科学の進歩早いので、私の学生の頃のおおらかな時代のように、専門だけ特化っていればいいやっていう時代ではなくなっちゃって、どんな時でも対応する学生を育てようと思うと英語を身に付けろとか、リベラルアーツだ、テラリストだとなって、どんどんどんどん教育のところの負担が多くなってくる。そういう面においても、とてもいいカリキュラムが私は組まれていると思います。

皆さんからいろいろご意見があったと思うんですけど、そのように思いました。

あとはやっぱりディプロマポリシーというか、アドミッションポリシーというところに少し菅原さんの意見もあるんですけども、やっぱり社会貢献をする学生を出したいという、そういう学生を受け入れたいということであって、なおかつ社会貢献できる企業の方に地域貢献という関連に結んでいければ、秋田高専の特徴がでるのかなと思いました。

インターンシップとか共同研究というのは、それは一つの手段なんですけど、昨今の外部資金得ろって言う、文科省からのきついお達しなのか、それもあるんでしょうけども。それは1つのツールとして、共同研究とか、インターンシップは活用して、社会貢献をする上での地域貢献ということに結び付けていければとは思いました。

とてもよくやられていると感服しております。私のコメントです。

では、ありがとうございました。ということで、議長のマイクを終わります。

飯塚総務課長：大石議長、どうもありがとうございました。

それでは植松校長から運営協議会の委員の方々にご挨拶を申し上げます。

10. 校長挨拶

植松校長：長い間、時間をだいぶ超過してしまいましたが、皆様よりいろいろ貴重なご意見をいただきました。どうもありがとうございます。

この2年間コロナ禍で不自由な生活というか、いろいろな苦勞がありました。よく言われているように、コロナの影響で日本のデジタル化の遅れが顕在化したということで、今年の9月にはデジタル庁もできました。

新聞なんかを見ていると、高専に対する社会の期待が非常に大きいなと最近特に感じます。地域貢献もそうですが、DX化に対しても我々はちゃんとした教育をして、世の中に学生を送り出していくと役割を担っています。それに対して社会も非常に期待していると思いますので、その期待に応えられるように、益々今日いただいたご意見を参考にいたしまして、これから教育、研究を進めていきたいと思っています。

今日はどうもありがとうございました。

11. 閉会

飯塚総務課長：本日は長時間にわたりまして、ご議論を賜り、誠にありがとうございました。なお、本日の記録は報告書として冊子にする予定です。報告書の内容につきまして、ご確認をお願いする予定ですので、その際はお手数をおかけしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

これを持ちまして、令和3年度秋田工業高等専門学校運営協議会を閉会いたします。今後とも本校へのご協力、ご支援を賜りますよう、お願いいたします。お帰りの際はお忘れ物などないよう、どうぞお気をつけてお帰り下さい。

本日は誠にありがとうございました。

I. 総務に関する事項（資料 4-1）

資料4-1



令和3年度 秋田工業高等専門学校運営協議会

I 総務に関する事項

- 1. 組織
- 2-1. 施設の概況
- 2-2. 学習環境等の主な整備状況等について
- 3. 予算の概要
- 4. 学校行事

副校長（総務担当） 安東 至

1



1. 組織



2



2-1. 施設の概況

敷地				(単位:㎡)	
校舎	寄宿舎	運動場	職員宿舎	合計	
45,461	18,421	33,625	3,758	101,265	

建物		(単位:㎡)	
建物名称	延面積		
管理棟	1,427		
講義室棟、科学技術教育棟(地域共同テクノセンター)、階段教室棟	4,927		
機械系棟、電気・電子・情報系棟、物質・生物系棟、物質・生物系棟別棟、土木・建築系棟、研究室棟、専攻科棟	9,256		
図書館、情報処理センター、技術教育支援センター実習工場・別館	2,834		
寄宿舎(管理棟、東1棟、東2棟、西1棟、西2棟)	5,619		
第1体育館、第2体育館、武道場、課外活動施設、厚生会館、その他	5,178		
職員宿舎	850		
合 計	30,091		

3



2-2. 学習環境等の主な整備状況等について

【令和元年度の主な発注工事】

- 1. 教室等空調設備設置工事
(講義室棟、科学技術教育棟、専攻科棟内教室23部屋に空調設備新設)
- 2. ライフライン再生(排水設備等)工事
(主に寄宿舎側の汚水・雨水排水管更新及び舗装改修)

【令和2年度の主な発注工事】

- 1. 機械系棟他空調設備改修工事
(機械系棟の内1系統、電気・電子・情報系棟の内1系統の空調設備更新)
- 2. ライフライン再生(排水設備等)(Ⅱ期)工事
(主に校舎側の汚水・雨水排水管更新及び舗装改修)

【令和3年度以降】

- 1. 国立高等専門学校機構インフラ長寿化計画(個別施設計画)2018及び国立高等専門学校機構5ヵ年計画2021に基づき、2019年度から2028年度の10年間で計画的に整備予定
対象:国立高等及び国立高等専門学校機構本部が管理又は所管する100㎡以上の建物及び基幹設備(ライフライン)
本校は、図書館、寄宿舎等が上位に該当

4



3-1. 予算の概要 (1) 令和2年度 収入・支出決算額

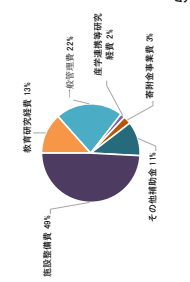
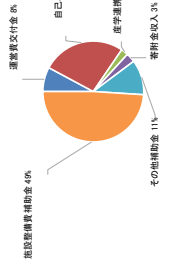
※常勤教職員人件費を除く。

収入決算額 (単位:千円)

区分	決算額	比率
運営費交付金	62,729	7.8%
自己収入	213,696	26.7%
産学連携等研究収入	18,402	2.3%
寄附金収入	23,676	3.0%
その他補助金	90,046	11.2%
施設整備費補助金	392,215	49.0%
計	800,764	

支出決算額 (単位:千円)

区分	決算額	比率
教育研究経費	107,094	13.4%
一般管理費	176,307	22.1%
産学連携等研究経費	11,757	1.5%
寄附金事業費	20,402	2.6%
その他補助金	90,046	11.3%
施設整備費	392,215	49.1%
計	797,821	



5



3-2. 予算の概要 (2) 令和2年度 収入決算額内訳

収入決算額 (単位:千円)		自己収入内訳	
区分	決算額	区分	決算額
運営費交付金	62,729	授業料収入	193,419
自己収入	213,696	入学金収入	14,551
産学連携等研究収入	18,402	検定料収入	3,003
寄附金収入	23,676	雑収入	2,723
その他補助金	90,046	産学連携等研究収入内訳	
施設整備費補助金	392,215	区 分	決算額
計	800,764	受託研究収入	8,788
		共同研究収入	4,291
		受託事業収入	40
		間接経費収入 (科学研究費)	4,017
		助成金等収入	1,266

6



3-3. 予算の概要 (3) 令和3年度収入予算

収入予算額(当初予算)の前年度比較

区分	R2予算額	R3予算額	増減額	備考
運営費交付金	0	342	+	342
自己収入	222,101	222,606	+	505
授業料収入	(197,199)	(196,446)	(Δ)	753)
入学科収入	(15,559)	(15,485)	(Δ)	74)
検定料収入	(3,436)	(3,432)	(Δ)	4)
その他収入	(5,907)	(7,243)	(+)	1,336)
計	222,101	222,948		

7



4. 年間行事 (令和3年度前期)

- 4月 4日(日) 入学式
- 5日(月) 始業式、新入生・進級ガイダンス、学生総会
- 18日(日) 開校記念日
- 5月31日(月) 前期中間到達度試験(～6月2日(水))
- 6月 4日(金) 高校総体(～8日(火))
- 20日(日) 保護者面談期間(～26日(土))
- 7月 2日(金) 東北地区高専体育大会(～4日(日)):中止
- 26日(月) 前期末到達度試験(～30日(金))
- 8月 7日(土) オープンキャンパス
- 12日(木) 夏季休業(～9月26日(日))
- 9月18日(土) グローバルエンジニア育成事業「English Village」(～19日(日))
- 24日(金) 「エンジニアリングキャンパス」(～26日(日)):遠隔による実施に変更

8



4. 年間行事(令和3年度後期)

- 10月 9日(日) 全国高専プログラミングコンテスト・秋田大会(～10日(日))
- 23日(土) 高専祭(～24日(日))
- 24日(日) 進学ガイダンス
- 28日(木) 全国高専体育大会野球競技・秋田大会(～30日(土))
- 11月 1日(月) 全国高専体育大会柔道競技・秋田大会(～2日(火))
- 7日(日) 東北地区高専ロボットコンテスト
- 11月11日(木) 学生総会、特別講演会
- 25日(木) 秋田グローバル技術研究会(～26日(金))
- 28日(日) 全国高専ロボットコンテスト
- 29日(月) 後期中間到達度試験(～12月1日(水))
- 12月 4日(土) 全国高専デザインコンテスト
- 18日(土) 4年生保護者進路相談会
- 25日(土) 冬季休業(～1月4日(火))
- 1月15日(土) 推薦選抜入学試験
- 2月 1日(火) 学年末到達度試験(～7日(月))
- 13日(日) 学力選抜入学試験
- 3月19日(土) 卒業証書、修了証書授与式

9

II. 国際交流に関する事項 (資料 4-2)



令和3年度 秋田工業高等専門学校校運営協議会

資料4-2

II. 国際交流に関する事項

1. 交流協定・覚書
2. 学生受入・派遣
3. 国際交流促進等

校長補佐(国際交流担当) 武井 由智

1



1. 交流協定・覚書

1. 交流協定・覚書

新規締結 (いずれも郵送署名)

R2. 8 シンガポール シンガポール・ポリテクニク (2機関協定)

R2. 8 韓国 京東大学 (2機関協定)

R2. 10 メキシコ グアナフアト大学 (2機関協定)

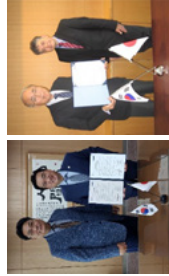
R2. 11 メキシコ グアダハラハラ大学 (2機関協定)

更新 *: 往來制限により署名は作業中

R2. 5* フランス IUT(技術短期大学)と東北地区高専 (コンソーシアム)

R3. 7* ベトナム 中央地域工科大学(2機関協定)

R4. 2(予定) フィンランド メトロポリア応用科学大・トゥルク応用科学大
と東北地区高専 (コンソーシアム)



京東大学(左)と秋田高専(右)
それぞれにおける教育交流協定署名式

2



2. 学生受入・派遣

2. 学生受入・派遣【海外留学生の受入：3年次編入正規留学生】

派遣先国	年度	令和元年度 (人)	令和2年度 (人)	令和3年度 (人)
ベトナム		0	1	0
	カンボジア	0	0	1
マレーシア		0	1*	1*
	モンゴル	1	1*	0
ブルンジ		1	0	0
	合計	2	3	2

*: COVID-19 水際対策により、遠隔授業受講を経て後期中に来日

3



2. 学生受入・派遣

2. 学生受入・派遣【海外留学生の受入：短期留学生】

派遣先国	年度	令和元年度 (人)	令和2年度 (人)	令和3年度 (人)
フランス (リール等)		3	0	0
	フィンランド (トゥルク等)	2	0	0
ベトナム		0	0	0
	シンガポール	4	0	0
タイ		3	0	0
	メキシコ	2	0	0
合計		14	0	0

4



2. 学生受入・派遣

2. 学生受入・派遣【本校学生の海外派遣】

派遣先国	年度	令和元年度 (人)	令和2年度 (人)	令和3年度 (人)
フランス (リール等)		2	0	0
	アメリカ合衆国	5	0	0
メキシコ		0	0	0
	フィリピン	1	0	0
デンマーク		1	0	0
	シンガポール	44	0	0
マレーシア		0	0	0
	タイ	1	0	0
ニュージーランド		0	0	0
	中国	2	0	0
合計		56	0	0

5



3. 国際交流促進等

3.3 国際交流促進等

- ① 高専機構タイ高専プロジェクト
R2.10、高専機構が募集したタイ高専プロジェクト推進校10校のうち1つとして採択された。R2.12 から教材開発等に協力。R4以降、タイ高専4年生短期受入れ事業を中心に参画予定。
- ② グローバル・エンジニアプログラム「海外技術研修」コース生への事前研修
推進中の「KOSEN(高専)4.0」イニシアティブ H30採択事業「5ヶ月間の長期海外技術研修を核としたくび型グローバルエンジニア育成事業」の一環、5年後期の海外留学を卒業研究相当とする「海外技術研修」コースに、
R2.12、創造システム工学科1期生4年生から8名が加入。
TOEICスピーキングテスト対策授業(R2.12～R3.2 全8コマ)、留学先選択、履歴書、志望理由書添削指導(R2.12～R3.4 Teams活用)からなる事前研修を実施。
R3.1、JASSO奨学金(協定派遣)採択(ただし、渡航は R3.6 までに断念)
R3.12、第2期生7名が加入。事前研修を開始している。JASSO奨学金(協定派遣)申請中。
- ③ マツコリー大学の遠隔インターン生受入れ
オーストラリア マツコリー大学日本語学科から遠隔インターンを1名受入れ(R3.8～R3.10)、学校要覧一部英訳や本校4年の英語授業への参加で活躍。

6



令和3年度 秋田工業高等専門学校協議会

Ⅲ 教育に関する事項（本科）



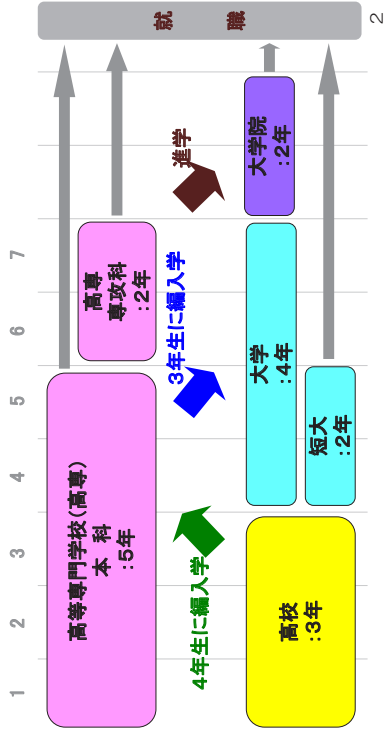
副校長（教育担当），教務主事
榎 秀次郎

1



高専の位置付け

5年間勉強し、卒業時に「準学士」を取得できます
2年間勉強し、修了（卒業）時に「学士」を取得できます



2



教育について

1. 学生在籍状況
2. 系の構成について
3. 入学者受入方針と入学生確保の取組
4. 入学志願者状況
5. 卒業認定方針
6. 教育課程方針
7. グローバルエンジニア育成事業
8. 教育環境整備
(e-ポートフォリオ, 遠隔配信教室, 学修支援室)
9. 進路関係

3



1. 学生在籍状況（令和3年11月1日）

創造システム工学科							合計
1年							149 (35)
本科	機械系	電気・電子・情報系	物質・生物系	土木・建築系	合計		
	2年	43 (11)	40 (3)	43 (15)	46 (11)	172 (40)	
	3年	35 (4)	44 (9)	22 (7)	50 (16)	162 (36)	
	4年	35 (4)	38 (7)	36 (13)	48 (15)	157 (39)	
	5年	41 (7)	33 (2)	31 (16)	45 (14)	150 (39)	
合計	76 (11)	71 (9)	67 (29)	93 (29)	307 (78)		
生産システム専攻		環境システム工学専攻		合計			
1年	16 (2)	0 (0)	16 (2)				
2年	10 (0)	4 (0)	14 (0)				
合計	26 (2)	4 (0)	30 (2)				
820名（女子191名（23%））が在籍							

4



2.系の構成について 創造システム工学科 (H29年度～)

隣接する融合分野の基礎知識をカバー
(複合科目/4・5年)



5



3.入学者受入方針と入学生確保の取組 (本科アドミッションポリシー)

求める学生像

1. 中学卒業レベルの知識・技能を有し、同等レベルの思考力・判断力・表現力などの能力を身につけている人
2. 理数系に興味のある人
3. 新しいことを知りたい、理解したいという学習意欲のある人
4. 自ら新しいことに取り組むなど、チャレンジ精神旺盛な人
5. 協働して物事に取り組む、ものづくりに関心のある人

6



3.入学者受入方針と入学生確保の取組

オープンキャンパス参加者数

遠隔開催
・ Teamsを用い
高専-各家庭、
高専-各校を
接続し配信

年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
生徒	295	146	277
保護者	172	33	157
教員	14	3	9
塾講師等	1	0	0
合計	482	182	443

進学ガイダンス参加者数

年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
生徒	104	96	115
保護者	75	49	77
教員	3	3	3
塾講師等	0	0	0
合計	182	148	195

7



4.入学志願者状況 (志願者数の推移)

年度	平成31年度		令和2年度		令和3年度	
	志願者数	推薦 (内数)	志願者数	推薦 (内数)	志願者数	推薦 (内数)
合計 (倍率)	189 (1.18倍)	127 (1.44倍)	182 (1.14倍)	110 (1.25倍)	151 (0.94倍)	96 (1.09倍)

女子志願者数の推移

年度	平成31年度		令和2年度		令和3年度	
	志願者数	推薦 (内数)	志願者数	推薦 (内数)	志願者数	推薦 (内数)
合計 (倍率)	44 (23.3)	33 (27.5)	46 (25.3)	32 (29.1)	33 (21.9)	26 (27.1)
合格者数 (%)	40 (23.8)	27 (30.7)	40 (29.0)	27 (30.1)	32 (21.3)	35 (28.1)

8

5.卒業認定方針

(本科ディプロマポリシー)



(A) 人類の幸福

目標：地球環境や人間社会と技術の調和を視野に入れて人類の幸福を考え、技術者倫理を理解し、責任ある行動がとれる。(健康・誠実・責任)

(B) 工学基礎知識の修得

目標：生産の現場に不可欠な実践的かつ専門的な知識と技術を有する。

(C) 専門的知識の充実

目標：自ら問題を発見・解決する能力を備え、生涯に亘って自ら学ぶことができる。(自立・協働・挑戦)

(D) コミュニケーション能力

目標：産業社会におけるグローバル化に対応するため、正しい日本語で表現(記述・口述・討論)し、かつ国際的に通用するプレゼンテーション能力を有する。

(E) 技術の発展

目標：複雑で多岐に亘る工業技術分野に貢献できる技術を有し、融合複合領域にも対応できる能力を備える。(挑戦・創造・研究)

学習教育目標に對する能力を身に著け、所定の単位を修得した學生に對して卒業を認定する。
(1)は校訓・教育理念である。

6.教育課程方針(1)

(本科カリキュラムポリシー)



(A) 人類の幸福

(A-1) 健全で多様な価値観を理解できるように、全学年を通して人文科学系科目を配置する。

(A-2) 技術者として責任ある行動をとることができるように、5 年次に技術者倫理を配置する。

(B) 工学基礎知識の修得

(B-1) 数学、自然科学および情報技術に関する基本的知識を修得できるように、全学年を通して自然科学系科目と情報基礎科目を配置する。

(B-2) 基礎工学と専門基礎の知識や技術を修得するために、低・中学年次に専門基礎科目を配置する。

(C) 専門的知識の充実

(C-1) 専門分野の問題を発見し、解決することができるように、高学年次に専門科目および複合融合科目を配置する。

(C-2) 実践的な知識を身に付けるために、全学年を通して実験・実習科目を配置する。

ディプロマポリシー(卒業認定方針)に掲げた能力を養成するため、一般科目と専門科目を各学年に系統的に配置し、学習教育目標に沿ったカリキュラムを編成する。



6.教育課程方針(2)

(本科カリキュラムポリシー)

(C-3) 地域や社会の要求している内容を理解できるように、高学年次に特別講義と技術者倫理、校外実習を配置する。

(C-4) 別に、あるいはチームワークによって、技術的問題を含む課題に取り組み解決することができるように、全学年を通して体育科目、高学年次では基礎研究、卒業研究を配置する。

(D) コミュニケーション能力

(D-1) 正しい日本語で表現することができるように、全学年を通して国語科目および演習、実験・実習科目を配置する。

(D-2) 英語によるコミュニケーションに必要な基本的能力を身に付けるために、全学年を通して英語科目を配置する。

(E) 技術の発展

(E-1) 専門領域および複合領域の専門知識を統合して、目的を達成するための問題解決とデザインに寄与できるように、全学年を通して演習科目および基礎研究、卒業研究を配置する。

(E-2) 技術分野の問題を理解し、自主的継続的に学びながら、開発・研究を行ってゆくことができるように、高学年次に基礎研究、卒業研究を配置する。



7.グローバルエンジニア育成事業(1)

(国際化の加速・推進)

概要

- ・平成30年度“KOSEN(高専)4.0”イニシアティブ採択事業
- ・5ヶ月間の長期海外技術研修を核としたくさび型グローバルエンジニア育成事業

目的

- ・少子化が進む秋田県において、グローバル化が進む産業界に対応するため、高度技術者育成カリキュラムを有する改組後の秋田高専に、早期技術者教育を受けた中学生を入学させ、英語によるコミュニケーション能力を強化したグローバルエンジニアを育成する。

- － 研究成果を広く国際会議で発表・議論できる英語力
- － 1人で海外出張に行けるTOEICスコア600点程度の英語力



7.グローバルエンジニア育成事業(2) (全体概要)



13



7.グローバルエンジニア育成事業(3) エンジニアリングキャンプ1

概要
・英語プログラムと自然科学プログラムを実施

対象

・将来エンジニアをめざし、入学を希望する中学3年生

日程 (令和2年度)

9/19・土曜日	9:00 - 9:45	受付開始, 開会式
	9:45 - 12:00	自然科学プログラム
	13:00 - 16:00	英語プログラム
9/20・日曜日	9:00 - 12:00	英語プログラム
	13:00 - 15:30	自然科学プログラム
	15:30 - 15:45	修了式

14



7.グローバルエンジニア育成事業(4) エンジニアリングキャンプ3/英語プログラム

目的

- ・中学英語の基礎固め, 高専英語に対応できる英語力の養成 (英検の問題演習, 外国人講師・留学生との英会話)
- ・苦手意識をなくし, 英語コミュニケーションや, 海外で活躍すること等への興味・関心を持たせる

内容

- グループ①
- ・「現在完了形」の復習, 英検3級レベル問題演習
 - ・英検3級レベルのリスニング問題, 外国人講師・留学生との面接試験演習
- グループ②
- ・「関係代名詞」の早期学習, 英検準2級レベル問題演習
 - ・英検準2級レベルのリスニング問題, 外国人講師・留学生と英語との面接試験演習

15



7.グローバルエンジニア育成事業(5) エンジニアリングキャンプ3/自然科学プログラム

目的

- ・「技術者が行う一連のプロセス」(学ぶ・実験する・考察する・議論する・発表する)の体験
- ・高専では, 単に座学や資料集等からだけではなく, 実験・観察を通じて, 学ぶことの体験

全体での観察

- ・光と色についての座学, 三色LEDによる観察・簡易分光器による観察

テーマ毎: 座学と観察を行った後に, ポスター発表を行う

- ・A テーマ/空と自然と生物と色について調べよう!
- ・B テーマ/電波望遠鏡で星の誕生や生命体を探そう!
- ・C テーマ/色の種類や効果について調べよう!
- ・D テーマ/色と温度の関係について調べよう!

16



7.グローバルエンジニア育成事業(6) エンジニアリングキャンプの成果

受講生数

・29名(令和2年度), 36名(令和3年度)

受験者(令和2年度)

・受験者数24名(83%) → 24名合格
・推薦による受験17名(59%)
・学力による受験7名(24%)

総括

・受講生全員が本校を受験し、全員が合格していることから、一定の成果をあげている



英語プログラム

英語力アッププログラム



7.グローバルエンジニア育成事業(7) グローバル基礎プログラミング

1年生(全体)(令和3年度より実施)

・計算問題(四則演算)を、英語で聞き取り計算できる

2年生(希望者)

・国際教養大学のEnglish Village(2泊3日英会話集中プログラム)を実施し、英会話能力、海外への興味・関心の向上

3年生(希望者)

・シンガポール語学研修(10日間)
・英検準2級程度, TOEICスコア400点程度の英語力を取得
・海外で何とか会話が出来るレベル



7.グローバルエンジニア育成事業(8) グローバルプログラミング

4年生(全員)

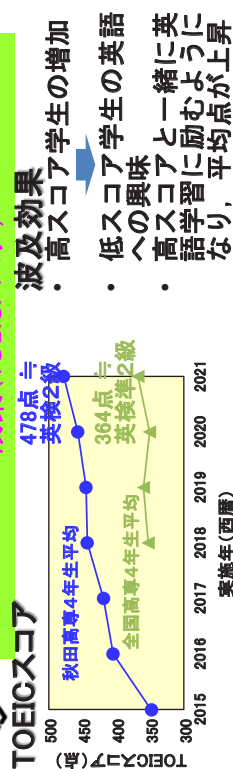
・TOEIC対策授業, スピーキング強化授業(英語プレゼンテーション力養成授業)を実施
・英検2級程度, TOEICスコア500点程度の英語力を取得
・海外で英語でやりとりができるレベル

5年生(希望者)

・5ヶ月間の長期海外技術研修(9月～翌年1月)
・TOEICスコア600点程度の英語力を取得
・1人で海外出張に行けるレベル



7.グローバルエンジニア育成事業(9) 成果(TOEICスコア)



高い英語力の定着のために...

(国際化の加速・推進に計画的に対応)

- ・1年(全員): 英語による四則演算
- ・2年(希望者): English Village(国際教養大学)
- ・3年(希望者): シンガポール語学研修(10日間)
- ・4年(全員): TOEIC対策授業, スピーキング強化授業
- ・5年(希望者): 長期海外技術研修(5ヶ月)



7.グローバルエンジニア育成事業(10)

海外連携校との協定締結関連(17校)

フランス(7校)

- ・ リールA技術短期大学
- ・ ベトゥーヌ技術短期大学、
- ・ ブロワ技術短期大学
- ・ ルアーブル技術短期大学
- ・ リトラル・コート・ドパル技術短期大学
- ・ ヴァランシエンヌ技術短期大学

タイ(1校)

- ・ 桑田工業大学

シンガポール(1校)

- ・ シンガポール・ポリテクニク

韓国(1校)

- ・ 京東大学

メキシコ(2校)

- ・ グアナファト大学
- ・ グアダハラ大学

モンゴル(1校)

- ・ モンゴル高専連盟

ベトナム(2校)

- ・ 中央地域工科経済水資源大学
- ・ トゥイロイ大学

21

令和2年度以降に新たに協定締結



8.教育環境整備

e-ポートフォリオ、遠隔配信教室、学修支援室

e-ポートフォリオの導入(令和3年度より)

- ・ ポートフォリオとは、書類入れやファイルを意味する言葉
- ・ TeamsあるいはOneNoteあるいは紙媒体(令和3年度)
- ・ LMSとしてTeamsに集約(予定、令和4年度)

遠隔配信教室(令和2年度より)

- ・ 学内配信: 4クラス同時配信
- ・ 学外配信: 中学英語授業サポート事業
- ・ 外国人教員、留学生の人材を有効利用
- ・ 地域貢献を通して、中学生・中学教員に秋田高専をPR
- ・ 令和2年度: 上小阿仁・阿仁・鹿角中学、理科教育も...
- ・ 令和3年度: 上小阿仁・阿仁・鹿角中学、理科教育も...

学修支援室(令和3年度より)

- ・ 学生の進学支援及び学力向上を支援
- ・ 令和2年度: 東北大学進学ゼミナール
- ・ 令和3年度: 進学就職キャリア教育講演会(3年生)

22



9.進路状況(令和3年11月30日)

	卒業 予定数 (女)	求人 数 (県内)	就職 内定 者数 (女)	県外 内定 数 (女)	県内 内定数 (女)	求人 倍率	進学 者数 (女)	大学 内定数 (女)	専攻科 内定数 (女)	進路 未定 (女)
機械	41 (7)	618 (20)	23 (4)	19 (3)	4 (1)	26.9	21 (6)	8 (0)	10 (3)	0 (0)
電気・電 子・情報	33 (2)	688 (25)	18 (2)	15 (2)	3 (0)	57.3	14 (0)	5 (0)	4 (0)	5 (0)
物質・ 生物	31 (16)	379 (11)	16 (13)	12 (9)	4 (4)	23.7	15 (3)	10 (2)	5 (1)	0 (0)
土木・ 建築	45 (14)	420 (28)	24 (8)	20 (7)	4 (1)	17.5	18 (4)	10 (2)	8 (3)	3 (1)
合計	150 (39)	2105 (84)	81 (27)	66 (21)	15 (6)	26.0	68 (13)	30 (2)	27 (2)	8 (1)

23



9.進路状況(過去3年の合格状況)

進学者数/在籍者数	2019年度 44/130	2020年度 46/143	2021年度 61/150	TOEICスコア 合格最低ライン
大学名	合格者数	合格者数	合格者数	
東北大学	0	3	2	650
北海道大学	0	2	0	630
秋田大学	4	7	12	400
秋田県立大学	0	2	1	500
筑波大学	1	0	3	685
東京農工大学	0	4	0	585
千葉大学	2	1	4	580
東京都立大学	0	0	2	650
横浜国立大学	0	1	0	580
電気通信大学	2	1	0	550
金沢大学	1	2	1	580
広島大学	0	1	0	675
新潟大学	7	1	3	550
盛岡技術科学大学	3	4	2	550
長岡技術科学大学	9	3	8	500
岩手大学	0	0	1	480
弘前大学	0	0	1	555
群馬大学	1	1	0	450
秋田高専専攻科	16	24	26	450

24

IV. 専攻科に関する事項（資料 4-4）

資料 4-4



令和元年度 秋田工業高等専門学校運営協議会

IV. 専攻科に関する事項

専攻科長 丸山耕一

秋田工業高等専門学校専攻科

1



教育の特長（令和 4 年度改組後）

- 教育の目的**
知識・技能を学んで修得する能力だけでなく、学んだ知識・技能を実践・応用する力、更には自ら課題の発見・解決に取り組み、多様な他者と協働しながら新たなモノやサービス、コトを生み出し社会に新たな価値を創造する力を育成
- 教育の手段**
本科（1～5年）⇒進学士
本科（4、5年）+特別認定専攻科（1、2年）⇒学士
① 専攻 4 コース制
数学・情報・物理関連科目、融合科目、専門科目、創造工学演習、PBL 工学演習
基礎研究（4年）⇒卒業研究（5年）⇒特別研究（専攻科1、2年）
- 特長（1）→自らの学びの場の提供→**
研究室学生 最大2名 / 指導教員
インターンシップ、海外インターンシップ
- 特長（2）→実践的教育と地域ニーズへの対応**
社会実装研究、これの種となる基礎研究、人材育成のための教育プロジェクト

② 副専攻制

秋田工業高等専門学校専攻科

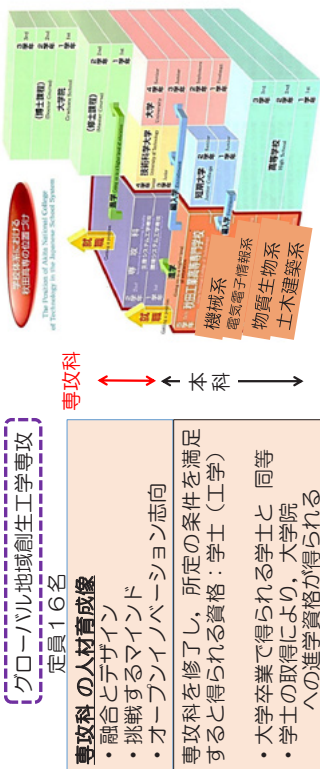
3



専攻科の教育体系

・ 平成6年設置

- 生産システム工学専攻（機械系と電気・電子・情報系の融合） 定員8名
- 環境システム工学専攻（物質・生物系と土木・建築系の融合） 定員8名
- 令和4年改組（文科省から認可済）
グローバル地域創生工学専攻
定員16名

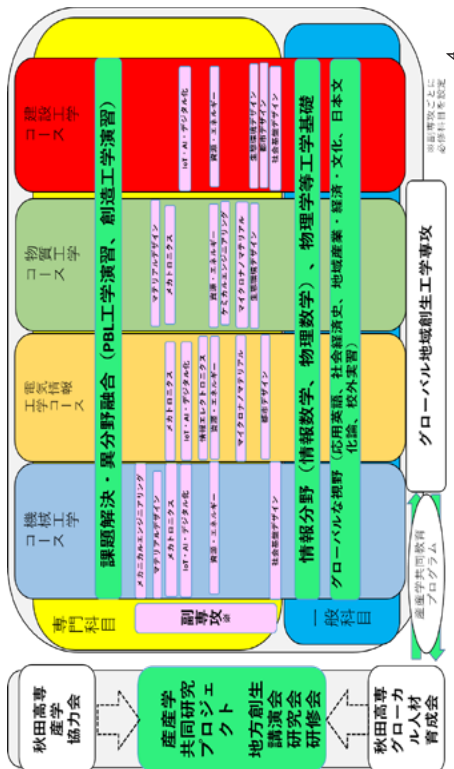


秋田工業高等専門学校専攻科

2



教育カリキュラム・プログラム等



秋田工業高等専門学校専攻科

4



入試の状況

1. 5年間の入試倍率の状況 (H30-R4)

定員16名 (生産8名、環境8名) ⇒ グローバル地域創生工学専攻16名

専攻/入学年度	H30	H31	R2	R3	R4
旧 生産システム工学専攻	1.6	1.5	1.3	2.0	-
旧 環境システム工学専攻	0.75	0.13	0.63	0.13	-
全体	1.2	0.81	0.94	1.1	1.6

高等専門学校評価基準 (機関別認証評価H29.1, R4.3 (受審中))

進学生課程の学生の受入れ 定員管理 (0.7倍~1.3倍)

2. 学力試験の受験科目

平成30年度入試より実施

TOEICスコア換算による英語受験の免除

専門教科受験科目数 3科目選択/12科目 (各専攻) ⇒ 4科目へ軽減 (各コース別)

社会人特別選抜 ⇒ (改組後) リカレント教育への対応

秋田工業高等専門学校専攻科

5



学士(工学)取得、進路の状況

1. 学士(工学)の取得、進学、就職の状況 (H29-R3)

専攻	項目/卒業見込年度	H29	H30	R1	R2	R3 (10/31)
生産システム工学専攻	学士取得率, %	100	100	100	100	90
	進学率, %	15.4	35.7	38.5	16.7	50
	就職率, %	84.6	64.3	61.5	83.3	30
環境システム工学専攻	県内就職率, %	27.3	11.1	25	10	0
	学士取得率, %	100	100	100	100	75
	進学率, %	50	0	33.3	0	50
	就職率, %	50	100	66.7	100	25
	県内就職率, %	50	33.3	25	0	0
合計	学士取得率, %	100	100	100	100	85.7
	進学率, %	23.5	21.7	36.8	15.4	50
	就職率, %	76.5	78.3	63.2	84.6	28.6
	県内就職率, %	30.8	22.2	25	9.1	0

秋田工業高等専門学校専攻科

6



2. 大学院進学先/就職先 (H28-R3. 10. 31)

(1) 生産システム工学専攻 (R3年度大学院進学予定先 就職内定先: 赤)

専攻	進路	進学先/就職先
生産システム工学専攻	大学院進学	秋田大学、北里大学保健衛生専門学校、総合研究大学院大学、東京工業大学、電気通信大学、東北大学、長岡技術科学大学、北陸先端科学技術大学院大学
	就職	秋田エフソン(株)、秋田工業高等専門学校、旭化成(株)、(株)アルス・ウェア、NECネットエスアイ(株)、(株)NTTデータフロンティア、ENEOS(株)川崎製油所・知多製造所、男鹿市役所、オムロンフィードエネジニアリング(株)、小林工業(株)、(株)五洋電子、JFEスチール(株)東日本製鉄所、(株)スズキ部品秋田、スタンレー電機(株)、セイコーエフソン(株)、ソニーエネジニアリング(株)、大陽日酸(株)、(株)タマディック、DMG森精機(株)、TDK(株)秋田地区、テルモ(株)、デンソーテクノ(株)、東京エレクトロングループ、東北エフソン(株)、東北電力(株)、(株)日産オートモティブテクノロジ、日鉄環境(株)、日鉄テクノエスエス(株)、日東電工(株)、(株)牧野フライズ製作所、(株)三井光機製作所秋田工場、三菱電機エンジニアリング(株)、三菱電機ビルテクノサービス(株)、ユニチカ(株)、横河リソリューションサービス(株)

秋田工業高等専門学校専攻科

7



2. 大学院進学先/就職先 (H28-R3. 10. 31)

(2) 環境システム工学専攻 (R3年度大学院進学予定先 就職内定先: 赤)

専攻	進路	進学先/就職先
環境システム工学専攻	大学院進学	九州大学、千葉大学、東北大学、北陸先端科学技術大学院大学、北海道大学
	就職	(一社)秋田県林業コンサルタンツ、(株)構造計画研究所、(株)高速道路総合技術研究所、(株)鴻池組、五洋建設(株)、関ヶ原石材(株)本社営業所、中外テクノス(株)、千代田工機(株)、(独)鉄道建設・運輸施設整備支援機構、中日本高速道路(株)、(株)日水コン、ニプロファーマ(株)大館工場、(株)ネクスコ東日本エンジニアリング、東日本高速道路(株)、東日本旅客鉄道(株)秋田支社、(株)三井化学分析センター、(有)村田弘建設設計事務所、由利本荘市役所

秋田工業高等専門学校専攻科

8



外部機関による評価

1. 機関別認証評価
平成27年3月審査結果：評価基準を満足
令和4年3月審査中
2. 認定専攻科における教育の実施状況の審査
短期大学及び高等専門学校専攻科の認定に関する規則
(H16規則第19号) 令和3年8月、審査結果：適
3. 専攻科の学生の学位の授与に関わる特例適用認定審査
学位規則第6条1項による学生の学位の授与に関わる特例に
関する規則 (H26規則第1号)
令和3年8月、審査結果：適用認定
4. 令和3年度 秋田工業高等専門学校運営協議会（本日）

秋田工業高等専門学校専攻科

9



専攻科の課題

1. 地域産業・社会への貢献
副専攻の定着（Society 5.0の実現）
2. グローカル人材の育成
グローバルな視点をもつ人材育成
3. 特例適用認定の維持
基盤研究と応用研究の両軸
4. 地域人材の育成
リカレントも含む教育プロジェクト

10

秋田工業高等専門学校専攻科



令和3年度 秋田工業高等専門学校運営協議会

資料4-5

V. 学生指導に関する事項

校長補佐（学生主事）木澤 悟

1



1. 学生指導体制

ー 本科学生及び専攻科学生の厚生補導のための委員会組織等

学生スタッフ： 学生主事 副学生主事 学生主事補（2名） 学生支援係

学生委員会（学生スタッフ＋学生委員） 奨学金、授業料免除、賞罰規則、通学指導等

クラブ等指導教員会議（学生スタッフ） クラブ活動指導教員配置等

いじめ防止・対応委員会（学生主事、副学生主事） いじめ防止基本方針 防止対策

学生相談室（副学生主事（副室長）） 学生の不安悩み相談、勉強の支援

学生会指導（学生スタッフ＋学生会執行部） 高専祭、合同会議の開催

高専体育大会 各種学校行事 交通安全教室の開催 各種啓発講演会

など
2



2. 就学支援等

・授業料免除、入学料免除制度、授業料徴収猶予制度

・奨学金制度についての情報発信

日本学生支援機構貸与型奨学金（第一種、第二種）
日本学生支援機構給付型奨学金
天野工業技術研究所奨学金
ウシオ財団奨学金
古岡奨学金
秋田県育英会奨学金、交通連児育英会奨学金、
男鹿市奨学金、あしなが育英会奨学金など

・高等学校等就学支援金

1～3年生 就学支援金年額 118,800円
保護者の所得に応じて一定額加算

3



3. 事故防止への取り組み

令和元年～令和3年度 事故届件数

	授業中	クラブ活動	登下校	その他	小計
令和元年度	7	8	14	1	30
令和2年度	4	6	5	3	18
令和3年度	6	12	11	1	30
計	17	26	30	5	78

（令和3年度は11月1日現在）

- ・授業中：校内における授業中のケガ（遊具など）
- ・クラブ活動：クラブ活動中（大会中）のケガなど
- ・登下校：登下校時における自転車交通事故（自損、接触事故など）
- ・その他：休日中の事故（バイク事故）

・不注意などによる自損（ケガ）が大半

4



3-1. 事故防止の取り組み (1)

全自転車通学生への個人賠償責任保険加入の義務付け（H29年度開始）



通学自転車用 ステッカー

通学指導：年10回（前後期5回ずつ）

- ・正門付近、西門付近
- ・前後期1回ずつ
随時警察署警察官、地域の交通安全指導員とともに
自転車の街頭指導と犯罪被害防止の声かけ

飯島地区町内会等との協力促進
周辺町内会長との懇談会
地域の交通安全指導員の協力による通学指導

5



3-2. 通学指導

R3年度後期通学指導要項

日時：令和3年10月4日（月）～11月24日（水） 8:20～8:40

指導要項

1. 自転車の交通違反走行：右側走行、並進走行、傘差し走行、ヘッドホン装着、交差点での一時停止、二人乗り、その他
2. 歩行者マナー：歩きスマホ、左側歩行

2021年度通学指導要項表

指導員	10/4(月)	10/14(水)	10/26(金)	11/2(金)	11/24(水)
水澤			①	②	②
寺本			①	②	
佐藤		①	②		
黒木		②		①	①
中沢		②			①
池田		①		②	
佐々木		①	②		
カラベス			①	②	①
佐藤		①	②	①	①
西野			①	①	
船本		②	①	①	①
藤田		①	①	①	①
長井			①	①	
トワ		①	①	①	②
藤					

秋田随時警察署交通安全課・生活安全課の協力



6



3-3. 事故防止の取り組み (2)

秋田臨港警察署との協力促進

- ・ 「秋田工業高等専門学校警察連絡制度」に関する協定の締結 (H28年度)
- ・ 地域自転車安全利用モデル校指定 (H29年度)
- ・ 犯罪被害防止モデル校指定 (H30年度)
- ・ 臨港警察署の協力による通学指導
- ・ 定期的な交通安全教室の実施
- ・ 犯罪被害防止、情報モラルに関する講話
- ・ 薬物乱用防止教育 (R3年12月予定)



指定校認定式の様子

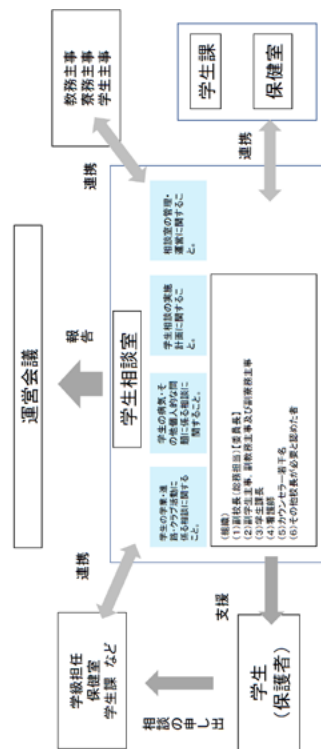


交通安全教室の実施

7



4-2. 学生相談室 対応体制



9



4-1. 学生相談室

学生相談室リーフレット

The leaflet is titled '学生相談室リーフレット' (Student Consultation Room Leaflet). It features a large green heart shape in the center. The text is in Japanese and provides information about the student consultation room, including its location, hours, and contact information. It also includes a QR code for more information.



4-3. 学生相談室 担当者・相談日

スクールソーシャルワーカー R3年度から配置

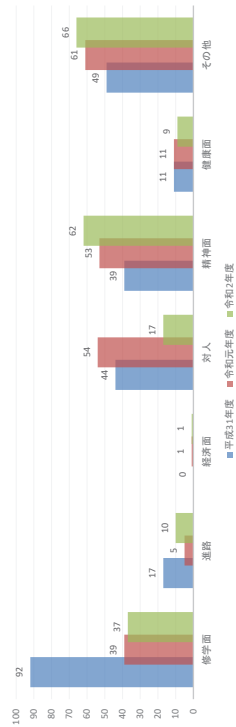
担当者	担当	相談日
高橋 賢一 先生 (学校医)	秋田県立病院 (内科)	10月 10日 (木)
戸嶋 愛 先生 (臨床心理士・公認心理師)	秋田県立病院 (内科)	10月 10日 (木)
田代 佳織 先生 (精神保健福祉士・公認心理師)	秋田県立病院 (内科)	10月 10日 (木)
相談室員	安藤 至 先生 (副校長)	018-894-1111
相談室員	寺本 尚史 先生 (副校長)	018-894-1111
相談室員	伊藤 桂一 先生 (副校長)	018-894-1111
相談室員	金 主 先生 (副校長)	018-894-1111
相談室員	若西 一宏 先生 (副校長)	018-894-1111
相談室員	若西 一宏 先生 (副校長)	018-894-1111
相談室員	若西 一宏 先生 (副校長)	018-894-1111

The calendar shows the consultation hours for the student consultation room for the fiscal year 2023. It is organized by month (10月, 11月, 12月) and day. The hours are listed in a grid format, with specific days and times marked for consultation.



4-4. 学生相談室等 相談実績

年度	修学面	進路	経済面	対人	精神面	健康面	その他	合計
平成31年度	92	17	0	44	39	11	49	252
令和元年度	39	5	1	54	53	11	61	224
令和2年度	37	10	1	17	62	9	66	202



11



4-4. いじめ防止等の対策

本校は、「独立行政法人国立高等専門学校機構いじめ防止等対策ポリシー」及び「独立行政法人国立高等専門学校機構いじめ防止等ガイドライン」に基づき、いじめ防止等のために実施すべき施策を以下に定めます。

【令和3年度】

- ・いじめ防止等基本計画
- ・いじめ防止対策プログラム(行動計画)
- ・いじめ早期発見・事案対処マニュアル

12



4-5. いじめ防止等基本計画

分類	内容
総則	- いじめ防止・対応は、本校教育活動の重要な課題として、全教職員が共通認識を持って取り組む必要がある。 - いじめ防止・対応は、本校教育活動の重要な課題として、全教職員が共通認識を持って取り組む必要がある。 - いじめ防止・対応は、本校教育活動の重要な課題として、全教職員が共通認識を持って取り組む必要がある。
組織	- いじめ防止・対応は、本校教育活動の重要な課題として、全教職員が共通認識を持って取り組む必要がある。 - いじめ防止・対応は、本校教育活動の重要な課題として、全教職員が共通認識を持って取り組む必要がある。 - いじめ防止・対応は、本校教育活動の重要な課題として、全教職員が共通認識を持って取り組む必要がある。
その他	- いじめ防止・対応は、本校教育活動の重要な課題として、全教職員が共通認識を持って取り組む必要がある。 - いじめ防止・対応は、本校教育活動の重要な課題として、全教職員が共通認識を持って取り組む必要がある。 - いじめ防止・対応は、本校教育活動の重要な課題として、全教職員が共通認識を持って取り組む必要がある。

13



4-6. いじめ早期発見・事案対処マニュアル

1. いじめについて理解
2. いじめの早期発見
3. インターネット等によるいじめへの対応
4. いじめ事案への組織的対応
5. 重大事案への対応





4-7. いじめ防止・対応委員会

委員会は、本校におけるいじめ又はその兆候を早期に発見し、いじめを未然に防止し、さらに、いじめに関する事案に対処して、学校組織としてその解決を図ることを目的とする。

委員会の組織

(1)校長、(2)副校長(教育担当)、(3)副校長(総務担当)、(4)校長補佐(学生主事)、(5)校長補佐(総務主事)、(6)校長補佐(専攻科長)、(7)学生相談室長、(8)事務部長、(9)総務課長、(10)学生課長、(11)その他校長が必要と認めた者

15



4-8. いじめアンケート調査(R3年度)

いじめアンケート(年3回)

- (1)いじめを受けていますか
- (2)誰かをいじめていますか
- (3)いじめられている人を見たことがありますか
- (4)いじめられている人がいると聞いたことがありますか
- (5)本アンケートで答えずらい場合は、意見箱へ投書してください。

いじめの講演会終了後のアンケート(年1回)

- (1)いじめの定義を理解できましたか
- (2)「コミュニケーションの操作系」のいじめについて理解できましたか
- (3)いじめは「教室」のなかで起こりやすいことが理解できましたか
- (4)いじめは「同輩集団」で起こりやすいことを理解できましたか
- (5)「スクールカースト」という言葉を理解できましたか
- (6)いかなる理由があっても、いじめをしてはならないことを理解しましたか

16



5-1. 学生表彰

表彰者数(R2年度)

秋田高専賞	2名	学習成果や課外活動等において卓越していると認められたことにより、卓越学生の授業料免除取扱いに基づく授業料免除を受けた者
学年優秀賞	20名	学年末総合成績がクラス上位1番の者、かつその年に懲戒処分がなかった者
功績賞	48名	学生会会長、寮生学生会長、学術的な活動により本校の名誉を高めた者、学会など学外団体の表彰者
奨励賞	5名	団体活動などで自己研鑽につとめ優秀な成績を上げた者
皆勤賞	4名	在学期間中、欠席日数、欠課時数の無い者

17



5-2. 学生の処分

「秋田工業高等専門学校懲戒に関する申し合わせ」の一部改正
(令和2年12月より実施)

〔 懲戒の基準に「いじめ行為」を追加 〕

懲戒処分学生数

	処分を受けた学生	処分理由
令和元年度	14	試験時不正行為、飲酒・喫煙など
令和2年度	3	飲酒・喫煙、不良行為など
令和3年度	1	無許可アルバイト

(令和3年度は11月1日現在)

18



6. クラブ活動

運動部	顧問数
陸上競技部	2
バスケットボール部	3
バレーボール部	3
ソフトテニス部	2
卓球部	2
柔道部	2
剣道部	2
サッカー部	3
硬式野球部	3
水泳部	2
ラグビーフットボール部	3
山岳部	2
硬式テニス部	3
ハンドボール部	2
合気道部	1
少林寺拳法部	1
バドミントン部	2

文化部	顧問数
エコーレス部	2
航空宇宙研究会	2
囲碁将棋部	1
写真部	1
吹奏楽部	2
茶道部	1
電気部	1

コンテスト

ロボットコンテスト	2
プログラミングコンテスト	2
デザインコンベンション	2
英語スピーチコンテスト	1

計28団体

19



6-1. 高専における課外活動の在り方

「総合的な方針」(平成31年3月:高専機構本部)

1. 方針の策定に当たって
高専総務委員の過度な業務負担や勤務時間外業務を解消するためには、大きな要因となっている課外活動の現状と課題を再検討し、今後の体制や行うべき取組を示す必要がある。
2. 適切な課外活動運営のための体制整備
学校職員として課外活動の実技指導等を行う**課外活動指導員**をはじめとしたスポーツや文芸・文化及び科学等にわたる外部指導員や地域の人々の協力、関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行う必要がある。
3. 合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組
競技種目、分野の特性等を踏まえた合理的でかつ効率的・効果的なトレーニングの積極的な導入等により、休養を適切に取りつつ、短時間で効果が得られる指導を行う。

20



6-3. 課外活動指導員の配置

本校では後期(10/19)より教員の業務負担軽減を目的とした、「課外活動指導員」制度を新たに導入、開始。

試験的に、指導員を年度内はハンドボール部の担当とし、他クラブ等の活動でも従来、指導教員不在では認められなかった平日の延長、休日の活動が部分的に可能とする。

課外活動指導員:本校教員OBを雇用

22



6-2. 部活動時間の変更

申し合わせ(R3年度)

原則として、1日の活動時間は、長くとも平日では2時間程度、学校の休業日(学期中の週末を含む)は3時間程度とし、できるだけ短時間に、合理的でかつ効率的・効果的な活動を行う。

平日の活動時間

- ◆原則14時30分～17時まで
- ◆延長は18時30分まで。(1クラブ1月当たり5日上限)

休日の活動時間(練習、大会を含む)

- ◆8時30分～17時まで。(週当たり1日、1クラブ月4回を上限)
- ◆週当たり2日以上は休業日を設ける
- (土日以外にも1日以上を休業日とする)。

21



6-4. R2年度 高専体育大会結果

新型コロナウイルス感染症の影響により、ラグビーフットボール以外の競技は中止

○ラグビー部 全国大会出場

23



6-6. R2年度 コンテスト結果

○全国高等専門学校ロボットコンテスト2020 東北大会:技術賞 全国大会:特別賞 ローム株式会社 チームA Run・Turn

○第17回全国高等専門学校デザインコンペティション 【構造デザイン部門】 優秀賞:「さどめんこ ニ〇二〇」 【プレゼンテーション部門】 優秀賞(空間デザイン)、特別賞(創造デザイン)

○国際会議「STI-Gigaku」 Best Research Presentation Award受賞

○2020年度先進的技術シンポジウム 優秀学術賞

25



6-5. R3年度 高専体育大会結果

○ハンドボール部 全国大会出場予定(12/22、12/23)

○柔道部 全国大会(11/1~11/2) ・男子団体戦 → 3位 ・男子66kg級 → 2位 ・男子81kg級 → 2位 ・男子73kg級 → 1位 ・男子無差別級 → 1位

○水泳部 全国大会出場予定(12/18、12/19)



24



6-7. R3年度 コンテスト結果

○全国高等専門学校ロボットコンテスト2021 東北大会:優勝 チームA「白熱!クウエペナ」 予賽イン賞 チームB「ARA」 全国大会 → チームA出場 26位

○全国高等専門学校英語プレゼンテーションコンテスト 東北大会 個人戦2位 → 全国大会出場予定 チーム部門 → 全国大会出場予定

○全国高等専門学校プログラミングコンテスト 自由部門 → 敢闘賞

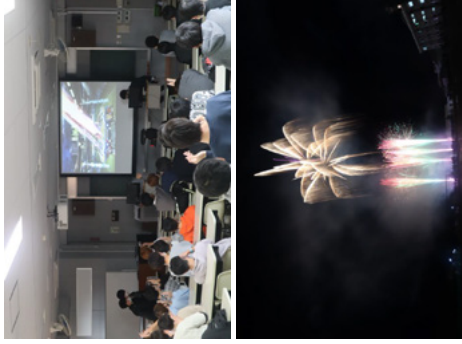
○全国高等専門学校デザインコンペティション 構造デザイン部門 → 15位

26



7ー1. 高専祭・スポーツ大会

高専祭の様様



R3年度:スポーツ大会は中止

VI. 寮の運営に関する事項（資料 4-6）



令和3年度秋田工業高等専門学校運営協議会

資料4ー6

VI 寮の運営に関する事項

1. 寮の運営方針
2. 寮の運営体制
3. 寮務の主な活動
4. 寮費とセキュリティ
5. 入寮状況
6. 寮生の日
7. 主な年間行事

寮務主事 小林 貢

1



寮の運営方針

学生寮は、学生の修学及び規律ある共同生活の場としての教育並びに厚生への施設とする。（寄宿舎規則第2条）

修学

寮生である前に学生である。
規則正しい生活に基づく学業成就こそが本務。

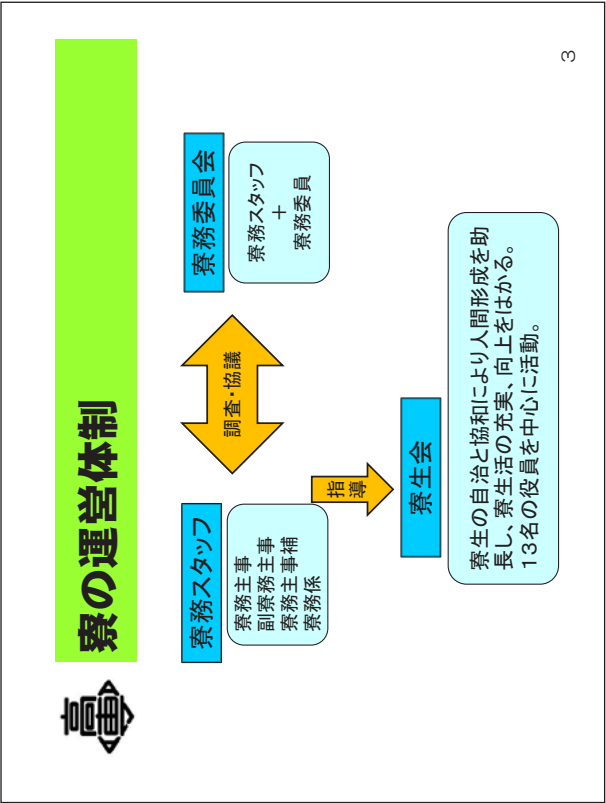
教育

集団生活を通じての人間形成を図るための教育の場。（学生便覧）

厚生

安全管理と食事の提供。
行事を通じて相互の親睦を深める。

2





寮務の主な活動

4

月	活動内容
4, 8, 9, 12, 1, 2	開寮・閉寮(式)
4, 10	避難訓練
5, 11	面談月間
6 (R3年度中止)	寮生保護者会
5, 8, 10, 12, 2	居室点検
5, 7, 11, 1	共同学習会
8, 10, 2	寮見学説明会




日常的な活動として、寮内点検及び寮生の日常生活支援を行っている。



寮費とセキュリティ

5

寮 費 一 覧

入寮費	寄宿料	寮費	給食費	寮生会費	寮生会入会金
3,000円 (入寮時)	700/800円 (月額)*1	13,230円 (月額)*2	約32,000円 (月額)	5,000円 (年額)	1,000円 (入寮時)

*1 個室が800円、二人部屋が700円です。
 *2 光熱水費、冬季暖房費、雑費、特別献立費等に充てられます。なお、寮費は電気や重油など情勢による価格変動があり、場合によって追加徴収することがあります。

昼間
寮務事務員



夜間
宿直教員

女子寮はカードキー

寮費のセキュリティ

安心・安全の24時間体制



入寮状況

6

過去3年(4/1現在)

	平成31年度	令和2年度	令和3年度
1年	14(5)	15(2)	26(8)
2年	15(2)	11(5)	13(0)
3年	28(4)	17(4)	11(4)
4年	28(3)	27(3)	17(3)
5年	26(5)	25(3)	23(5)
専攻科	0(0)	2(0)	0(0)
2年	0(0)	0(0)	2(0)
留学生	7(1)	7(1)	7(1)
計	111(19)	97(17)	92(20)

()は内数で女子

寮生の一

自律的な学校生活で修学をサポート。
共同生活を通しての人間形成をめざす。

日	7:00	7:30	7:40	11:50	17:50	17:00	21:00	23:30
平日	起床	点呼	朝食	朝食	夕食	学習	点呼	消灯
休日	—	—	7:40	*10:00	17:50	17:00	21:00	23:30
			~8:10	*10:30	~18:40	~22:00		

* 休日を除き三食とも食堂で摂ります。休日は10:00~10:30の間に昼食を配布します。

点呼（左数棟目）

点呼システム
毎日2回。
健康管理。

7

主な年間行事

— 寮生会が企画・運営

4月 新入生歓迎

7月 寮祭

10月 なべっこ
コロナのため中止

1月~12月 予備会

8

令和3年度 秋田工業高等専門学校運営協議会

資料4-7

VII. 研究・社会連携に関する事項

Ⅶ. 研究・社会連携に関する事項

副校長(研究担当)宮脇和人

1

地域共同テクノセンターの取り組み

地域共同テクノセンターが窓口となり、秋田高専産学協会の会員である地域企業、グローバル人材育成会の企業や県庁、近隣大学等の学術機関と連携。

2



主な活動状況

- (1) 企画行事の継続的開催
- ① 令和3年度 技術講演会(7月7日)
対象: 本科5年生、教職員、産学協力会会員企業等
 - ② 科学研究費助成事業講習会(7月28日)
 - ③ 科学研究費助成、個別相談会(9月1日、9月13日)
- (2) 県内外の連携事業に参画
- ① 東北・新潟産学官金サロン(8月26日)
 - ② 高専 第1ブロッック研究推進ボード会議(8月、1月)
- (3) 地域共同テクノセンター報16号を発刊予定。

3



活動状況2

- (4) 知的財産関連の活動
- 知的財産権セミナー特別講演会(11月10日)
対象: 本科4年生、教職員、産学協力会会員企業等
- (5) 産学官連携についての取組計画
- ① 秋田県産業技術センターとの共同研究を実施。
 - ② 企業との連携を推進。

4



秋田高専産学協力会

- ・ 地元企業と高専との交流のパイプをもっと太くすることを
目的に設立
- ・ 秋田県内企業 90社 (令和3年11月現在)
- ・ 会長 菅原雅史(インスペース株式会社代表取締役社長)

役員会・定期総会 令和3年6月3日 (Web)

5



秋田高専グローバル人材育成会

- ・ グローバルな視野や経験を活かして、地域社会や地域経済に貢献できる人材を育成するために、企業と高専との交流のパイプをもっと太くすることを目的に設立

- ・ 会員企業 93社 (令和3年10月現在)
- ・ 会長 榊純一(株式会社IHI 元顧問)

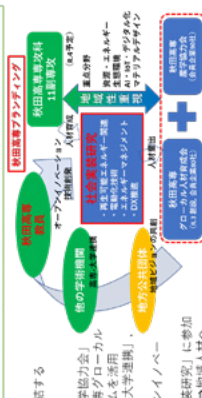
役員会・定期総会 令和3年6月22日 (Web)

6

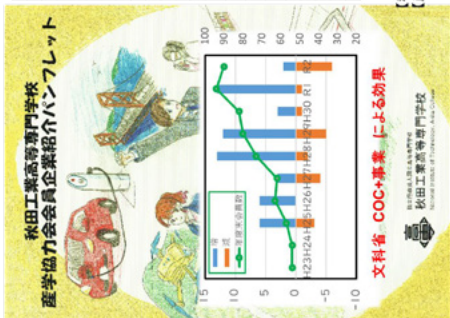
7
發起人代表 植松康 校長

[illegible]

00

[illegible][illegible]

9

[illegible]

秋田高専内)グローバル人材育成推進委員会設置
産学協力会・グローバル人材育成会】
各々の役員会にて「参議の会派」に合意
⇒令和4年度中合流を協議中

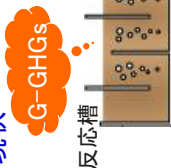


共同・受託研究事例 1

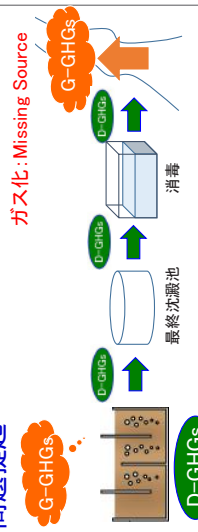
環境研究総合推進費(東洋大学(代表機関)、国立環境研究所、秋田高専、東京農工大学、R1～R3年度)

秋田高専担当: サブテーマ2「下水処理プロセスからの溶存態GHGsの流出機構解明」 土木・建築系 准教授 増田 周平

現状



問題提起



主要な生成源
＝発生源

放流水に含まれるD-GHG'sの排出・ガス化
＝潜在的なGHGsの発生源

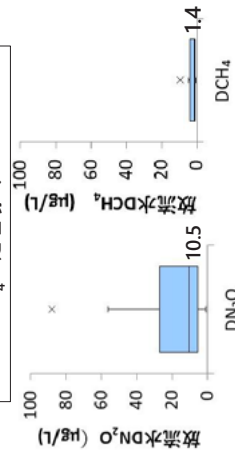
D-GHG'sの流出機構解明/ G&D-GHG'sの削減策を提案¹¹



受託研究の成果

放流水のDGHG's濃度分布
N₂O: 11処理場14ケース
CH₄: 6処理場6ケース

GN₂OfluxとDN₂Ofluxの比率
国内10処理場14ケース



- DN₂O > DCH₄ (約8倍)
- DCH₄のCO₂当量はDN₂Oの約90分の1

G-N₂Oの約4割相当が
D-N₂Oの形で放出

N₂Oの定量と削減が重要・わが国のGHG算定手法への反映²

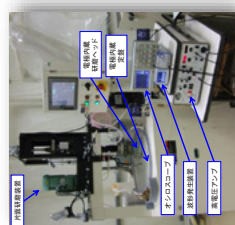


共同・受託研究事例 2

研究テーマ 次世代半導体基板研磨システムに関する研究
開発 機械系 教授 池田 洋

SiC, GaNなどのパワー半導体向け難加工性材料の高効率CMP技術の創出を目指し、従来のCMPプロセスに電界制御技術を適用させることによって、良好な研磨特性が得られる新しい加工方法を創出する。

秋田高専
◆ スラリー挙動観察・研磨実験装置の設計製作
◆ スラリリー運動特性の評価



秋田県産業技術センター
□ 片面研磨装置による研磨特性評価
□ 研削装置・電界条件の最適化検討

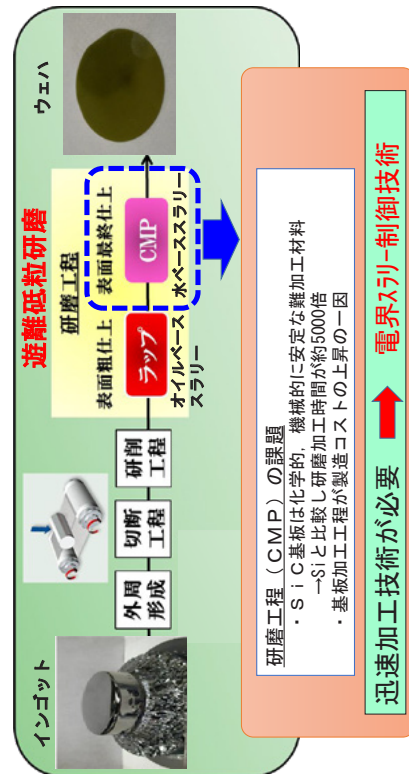
共同研究



共同研究



遊離砥粒研磨プロセス





高専

直面する課題と展望

1. 科研費 申請率を確保しつつ採択率向上
基盤(C)から(A)、(B)への展開
2. 各種外部資金への挑戦
(財団・学会等からの研究助成、
企業・大学・地方公共団体との共同、受託研究)

21



独立行政法人国立高等専門学校機構

秋田工業高等専門学校

National Institute of Technology(KOSEN), Akita College

令和4年3月発行

〒011-8511 秋田県秋田市飯島文京町1番1号

TEL 018-847-6107 (総務課)

FAX 018-857-3191

E-mail somu-dv@akita-nct.ac.jp

HP <https://www.akita-nct.ac.jp/>